昭和六年日記

NOTE BOOK

[illegible]

[illegible]

昭和 6 年

[illegible]

夜光雲

巻五

昭和六年

またたくみなかの
これをかくかなるべき
ゆつるのみかはまたば
こりてきたるの眼ろかな。

小笠原長生

雨夫雪は美しく、美しく人に於て明らかん
日記の体をなす従て淡々たるものすら
ずけてゐる。これは陸奥湾であるかしらん
つまらぬ歌文をかくのはつゐに公にせ
ぬ。もしそれをいるかるるかもしれぬ
もしそれをいるかるるかもしれぬ
もしそれをいるかるるかもしれぬ

昭和二年一月一日

元はやはりその雨のめぐみ
雪のごく社歌にあそぶ子猫かな

歌ゐ

金田のきみ子 女

きみは車にゆられの陸奥の山のはとをわたりもとめてゆきけら
立の山のぼりのぼりて石標の里程みてはもとりもとりし
陸のやまみち芽の草は繁るたらひそてんひにみてるとめ
清流の草の丈をみ傷ふる子供のゆくは間きるたらみ
たのの山おくのおくまで無明の舟いるしほをうすくこをとをきや
たのめ杉の林の中にて谷川の水ながれ
たのの山い朝のための鶏鳴ばおしはすいし間はまいこる

金田の敦子 ―― 同 モトイヤとも子ヤ

金田のすみ子

畠の元子と山即子

肥下恒夫

金田忠義

雨やすもてよいしもしる雨文とりはそのこの事はきかずこうし
（右ノネヲ曰ク）

肥下ひとまる

もしこの野路なる遊ひとゆきてかりをみるへあらそやみは
あのちをはの丸の旗ちりのたれ雪もよいるえりの穴
鈴掛い電車かい鳴ばさとざと者淋い雪ちりこめるえん

一月二日

松浦悦郎君
西川英夫君
友貞久衛君
中橋吉長君

親るる

今井俊一

こころさへ弱くなるのにあうむ年のほぎことばいわけていばむとおそれ
おのしからの口調でさとすおほうちのまなこのくぼみさらたしうも

一月三日

親るる　父と

上念頭七

いたつたロレやうわるロやのなさ木いく年うとわれはおもわに
西尾結木九加社会主義吉なぐ民主の義吉ろ

上念南三郎　KO二年　政治科

上念南三郎　さと

おほはくの妹なんばわめきのおほはく思へそうつ

平戸松三郎　大和高の本家に同居

ちーちうは二つ年下で家あるが貞二の父

[illegible]

博田正元

一月廿日　わかれ　礼を受けた由
まいる大浄のも中から
聖堂が泣を会してわき上ら
そうの定無にとけちつてうめ
あとんはしはこく泣かさなくが
やかてもとの静けさけれどあ
そうのいろをうつすではないか
わがこものいまはちめこうも天つ国ないうそたてちかへよそへよ
いにしへの勇士かわもし天国かこどもの逝がさいの河原か
どんなうと雲木る沼んれる近く勇涙きくる水滝の上に
どんなうと眠にうてみたうけれもはやえざらむとかなしみわかる

の七

田中義郎　の七孝

小泉しづう

一月廿日

短冊に小雪のいたるまを今かな

（右相南の歌）

一月廿日

上念南三郎を　林七春一さん　熱田見の七郎
御殿と東あるをいもむさよ
ぬれみちはえをむこのそのそ

一月六日

市場ヶ浦

おとうとよいまあかい陽がのぼる
曙の空を鳥がとぶする
きみ達どもたくさん林にうまれ
露をあびた花がちかづくだろう
おとうとよいまきみのこころにも
朝日のぼってゆくほのぼのを感ずるか

お正月はなにもなくてあたまにたてたこころがおぼるよ
いなかのうらの雪ちらほらのまんなかからもかくのをんておまえはいたる
言うのに吉ちゃんてわるおおまえのあはそくロイドをそれほどかもしろいかよ

南天に鳥きてとまるいそけさや
ほっぽほ子
南天や赤ら[illegible]のあさ

× × ×

上吉の南天ちゃんに
正月の水ぬるやわたし達ったのかおしの松ばらの花
水白の川口をゆきをみなとあい舟翠でたつをきみは見ないで
名岩積み船ばしでゆく白の岸のおとうたうすこしるすもの
川口に汽笛ならし船でゆく水の白ひとおとしするかな

× × ×

きさらし
でんすうと海ばにかりてみたりけれ川口に水いたこがきて

一月

おぼろにもやはいろ海面いま船々は燈をともしけり
海おもはのぼるまやのけしのあるの灯ようみんなから生
なくなのれゆうれ来ると流れ死ぬ流れ死ぬるにきれる子ず
日の丸の旗ゆるかす海港をとおして入る 外国のあり

一月七日 始業 三浦 伊藤さん
一月八日 松浦 中島 ふじべん
一月十日

雪原

悲しみの白い息吐きのたらゆく車の跡の氷をあみに
大原にあいき止めば日光ます 鳥はしばらく土を探さう
悲しみを和やわらに街に出るに白いかうーをさがさねばなるぞ
あまるにこの石像に歪みある歪みるまいにせむすべもなし
やもりは腹赤木と冷血動物ならば冬原にそのむくろさらさず
植物が青いからとて都会中に蔓るんあるを君は知るかよ
この藪に赤い実つけた海本があるわなわけにゆくたびに見てある
植物の常緑葉先のこのみちは君と歩かう夕をつけてゆかう
あざけ好きの人間がかたひとびみで泣いて見せてるそれもんにゆけ

（つゞきに）

かたわもくたった一本の足を輝き折ったれば電車はゆくず
雨夏くれば天ばば眼玉を光らせいい強い眼はみかわれてある
悲しみを一度埋[illegible]たる美紙ばら
悲しみを一度埋[illegible]しようとする古空の重さを感じねこうんでみる。

ヴェルレーヌ（六・一・一三）

素戔嗚の尊は
蓬々たる髭で
出雲の國を行かれました
その次は大山が嘆いておりました
湖ばたに蒲がええておりました

×

奇稲田姫は朝鮮服を着て
川ばたで泣いてをられました
百合の花が流れておりました

×

野火が盛りです
大國主尊が野中に立ておいでです
鬼や野鼠やあらゆる野獣が
あばらん集っております

×

はるけくはるけく水平線から
陸がゆ木下ら近づいてきます
海の波がなんく荒くなってきます
空は良晴な日和です
白い波頭・津野主尊の髪

月は姿をもえ上る
沙漠に魚が跳ねまわる
栃子の稍ん噴水が
あゝ大空のいなづから
くろとしにあの結晶水

× ×

大寺の甍に鳥とまり
いるの景色に気絶する
雲が支る空を、もう見えない
防火線が破裂して
星のかけらが降って来た

× ×

葉蔭の花も咲きました
いきかへる出るゆゆしくは
いろいろの色が固まる

× ×

華やかにはなやかに
をんな泣くこゑ
シャボリの音ひとしきり
眼・目玉・ヨウ
大理石の柱

ばらけきにとみな思へば
緞帳に白い月出る
孔雀の羽のきらきら光りよ

× ×

亡びる民族の兄ひとりよ
煙管

× ×

ひとりでいるものたちは
すとーぶのあげを語ることで
棚の石像が泣くとば
あるちゅーるらんぷおの死ぬまへ

× ×

ひえやかに
人々の逢わよるは
地球の裏側の寒さ
山々が結晶する

× ×

静脈が破れて――
まくころんびいぬのすくら泣き
鼓で自孔雀のぱりたき
冷い音だね、琥珀の環は

あるときの
きまぐれゆえにひとをこひ――
こはれしひとはいかにすべきぞ

×

神經がいたむといへば
そらをゆく雲の早さを測れ

×

むらさめよ
ゴムレインコートひるもよるも
やすめぬほどの根気ももてよ

×

言ふはやすに思はぬをんなを
話すなかれ
こひ死をとるよ おれにはあらず

×

なくれなくれ
わたしの白いてゐるぞ
ところいろどつまよなかすぎに

×

お酒のむ子供悲しと
いふおまへ
のまぬ子供はうれしいとおか

夢の戦争（一一三）

一

兵等集りて日々に街を焼けりしが炎の中より不死鳥生まるを知らざりき

されば火は燃えつゞき遂にかの白堊の殿堂に及ぶ

火を防ぐものあらざりき、火を恐るるものあらざりき、かしこゝに一群、炎のいろの鮮けさを嘆じたりけり

二

混凝土の林になかなかとこだまする拳銃のひびき

うつろなる館にひとり居れば脳にこだゝてなるゆゑなり

ここにもて日の暮れ、去年擢は未だにあり、眠うた眠覚めむ時は鏡面の光の下ならむとも

なく、うつろなる拳銃のひびき。

西部戦線異状なし を観る

峡田は雪のもつる鮮しき青葉の凋れけるも復ぶ

流れるこの河すらも凍らなむ熱さいまるとまのしるしに

まつ白な壁に頭をうちつけてもかゝるに死ねばたのしいものか

たましひのあるなし語るよるならけらくらまにおびやそを信ぜねど

ひとびとの一死にゆくとまばまつ先に死んでみせるがいとよかるべし

×

十八の若者のゆえに拳銃をもて蓋にけものも出にける

いのちと一死といまだ思はねどてのひらの銃の冷たにおのゝかれぬる

たまたまはるいのち捨てる義務をみなこうやばいのちおしければ

戦ひのらつぱは町にうづいき昨日も今日も兵器ちゆけり

若き兵らえまてゆく街路樹は涙ながるるそのえまひゆえ

×

市街戦いまは絶頂よ木以上いのちつゝやすべきは事にあらず

革命の兵士のひとりとなりて後悔の涙いま流しとら

革命の成就する日は来るともいのち死ぬべきわれ滅らざらむ

いのちいのちをしけば町に出てピストル買いぬ[illegible]なぐさに

×

雪降く地にかくるひるすゑは弾丸に死ぬるを思ひからむ

あいせるの野のもいまは恨みない二木ほど惜しいのち恨めば

一月十三日午后三時四十五分堺四丁目元天國を信じて永眠す
一月十四日 神戸友愛教会にて午后四時半より葬儀
棺をおく

西空にくもひろがるを見てゐつくしみの紫雲を経（にけるかも
きみゆきしぺぺぺいつこをむそらの雲のかなたに姿見ゆるも
一つしよのからだらんをに近つけば唇いろどりしひとばあらける
そらのいろうすあをくしてきはみなしきみをはらむ日ぬ降りけり
かなしみとくいつまるときまたなかるむてこよわわれてゐに会い得ず
みはありの教会の窓のもとゆきし白猫のすがたわすれざらむよ
春日野の墓地にゆうかぜ吹きいたりきみをわかれるときいたりけり
天女らは散華をおろし聖衆おくるまよく生きたるおそうとの為め
死にいたるまでかなしきことばもてよっかげずいまひそやかにくらか（すとも
おそうともなる（くなりし海港はよるの灯ともしひろがりてある
大いなる夜空より星よその下に海港ともしの灯つらかもてを
海港をゆきしにほ（るとめ子のひとりを思はず一生にけものを
ひん々らの生垣めぐる墓ぢろ変化来らずきみきよければ
みひつぢの冬の方かきし兄弟とわれを木ゆきかるしと思はかりけり
むこ山の遠ゆのいろをかたらつくみかはらにいたりけるかも
みはあらをお（はてしかば昔にゆきそこになかむとせしとも年年
さらばらに棺の白さで涙ひける歌をうたはきみかためならず

一月十六日
フーラス聯盟第一回大会 於朝日会館
一月十七日
肥下と保田と（

大和に来て雪まだ凍る葛木の山のうら側をさみしみにけり
三輪山の尾の谷や樫の木のもに据えたり二の石佛
石佛二尊いませばおのづから兄比べてゐるかこ生とも（弥勒、地蔵）
東山に柴かく女ら牛ぼく人とほしとはおもひみたらき
羊歯の葉の成熟（みの）る夏木ばいまなむよみ冬はつて春来るらし
さむざむとほゆる光るひるごろを温木しなりわたるかも
堤の芝草の間ゆくときに泣きさうになる至こらへてゐたら
石佛の苔むす兄木ばはるばると造りしむし思ひ木るかな
いのちのもろもろのいのちみてくせるを三人ちてえさたけり
おのが身の軒屋（ちたけ姿）するにえ木なしあけ木まれつ生きつなかさよ
ひとびとはしづまる木ば夜更生おもあ（巨達（やだつ））たる部屋のそむ之者
遠方（えん）に来かつた山がひとつある。何といふ山か新つて見ることよ
椿市は立ひに牛ば金屋なる石佛は風にたちて木たまあ
樫の木にもたらたるあ佛達・涅槃おも（てたとまろかも
樫の木や風わたるも幹ふかず佛二体をよらしめにけり
夏みかんの実る木ちら往来に兄て空の光に兄比べにけり
吉野山西行もるかを仕さを偲びてゐるものいかかまは

海と星（一一七―二〇）

―空―

一、軽気球あがれる空のすみ（軽に）ものかなしいは眼にもえくるも
軽気球の繋索きれよ（そらのいちばんあかるいのやみ）くれ入らんため
おくふかきそらのまん中に

×

二、春空のあんどうのかの星これし魚旅もゆむるゆゆ空のもと
太陽のてるこころ例に星らみてこよいの雲にかくれにける
蕾薔薇の花ちり降りまるこころいろいゆゆ一男（ひとりはゆど）の星のため

×

三、聖堂の空にまえ（はて）（なれにけり）（ゆゆとまと）自猫（ゆゆにかくれめ）
あま上げはのぼりてそらにいたらずず（ゆゆ花ゆゆるゆゆ）
いましらくとやぶにさかけど

×

四、星やとものおしらくゆゆ（はる）空は失ゲの花を咲かしめにけり

―海―

一、桟橋を船はこころ（まるこころ）ぶくらは船のなをえにゆゆ
もたちゆゆ死人だゆゆばとて海港の埠頭に来る魚をにけり
桟ばしの海をおおける魚らの跳（しゅん）は水面にいっぱいになる

×

二、どんちゃと沖が暮つて都ゆゆば露台の椅子に誰も来ないで
断岸の木テルの白さ日雲り日の沖ゆく汽船は留止まずなるす

×

三、海ばたの療病院の桟橋に犯人船の着く時設訓ぬ
犯人らのこころもしきこゆ早くも紫いろの船は来りし

×

四、地図ゆゆば太平洋は青からけら赤き航路に目をおしあてぬ

×

五、港町の十字路（つじ）はかなしいるすぎは波立てる海見えてくるかも
白波そあまあげる海（ゆゆみちにきそいとゆるゆしぎでならぬ

×

六、わが室は三方の壁に画をかけて海きく窓はあけておかうよ
にんげんら死にゆく時は時計塔に鴉（からす）どいて嘴かんとすらむ

―ある之と―

一、ふるさとに夏雨立てば松原に自分はくはぬきのことりけら

×

二、三大星しづしづのぼらわかともの別荘のうちにとどまりにけら
花禮（はなぎん）の山菓子もらうたこと取ずてざくろ咲く家にひる中かゆゆ

×

三、ゆゆゆゆばくさきの花白い咲くかはづのたぐひ青く光り出る
村中でも蛍草生ゆ夜ゆゆば蛍来る夜をゆゆは待ちけら
古井戸に蝸逃（ゆゆ）むしめてこころしのぎにゆくゆゆならひとゆゆら
爬虫類の卵をかへすおそろしさ蛇（ゆゆなは）ゆゆらばどうしようとぞ

神戸港（一、二〇）

増田正元追悼會、元町の鈴蘭燈より

日のくれはなかなかこないであの塔の硝子の中に誕がうごいてる
方々の時計塔の文字がはつきりと見えなくなるやうな海のくれ
巻雲のとびちる空のたかきくれてだまなかうて上海れの出港
川崎の煙突のむかうにおちるときまつぷたつにならし赤き陽はも
ひそひそと船例をとほらぼくゆくにマストの上を弋鳥まつてゐる
山々の影大が身にしみえんでフランスの旗おろすを見てる
海いつぱいに腹赤き船浮かべて煙吐くをれば旅かい思はゆ。
きらきらと空六く光る十字架のとうとさゆえに涙ぐみしか
海波の暗さを見れば おそれにきさほど恋しくてわれはみにけり
あゆ海はしほにほはずいたる流るいろくずどもゆむらあかけれ
魚等の名眠のまま見にゆかんいのちのちらすきこころに
ゆにおんとやつくいるかつず高舘の碧眼の児横笛吹けよ自轉車やめて
いつまでもこんくりいとの林あるにつれなくさむく陽はうごきけり
方々の時計塔だけ日かのこるそのたまゆらはみなしいものを
ぺーりぺーと日々の笛吹きならしゆゆしば笑ひは碧眼の子らかなし
すずらん燈あおれば木ども他のまちなれば あつもり草を買はむと思ふ
おれの血に浪費癖あるあつもり草みんな買ひ占める貪欲心ある
き小いな女がつれ立つてあるくこの街でわかはづかしさ狸々木となる

春の花

フリーチャーよフリーチャー
飾窓の中に咲いてゐた
女の児が眺めて行つてしまつた
白いもしないフリーチャーよ
もつとも寒い日だつたが
ひとばしらない
春の海の真中におき（が一杯咲く島のあることを
その近くをとほる凡ての船を
恍惚たらしめる白らの高い島のことを
おれは知つてゐる
それゆえ春の絵をして飾窓の硝子に
絵をおしつける。（一、二六）

此年であちこちたしねらるや
ひろこの外套着たれいていに似て
緊痛の意心を感ずしめる。（同じく）

ゆびもの石をすいすにゆくときはさらさうさけものあとに
岩角にもしなとべばかそしかぶらむらの花ちにけるも
あるかすの言みに咲けるよりむらはきにあれて日をこにけり
[illegible]

「最後の中隊」　J.E.MAY. KONRAD MEIER.（一、二九、）

唖唖と啼く鴉に石を投げうとよ　戰友の眼を啄ばもうにけり。

死屍は日に日に腐れゆくらしも　戰はつる日はいつならむ。

沼深きこの國原に死にゆかば月の出毎にひと嘆かむを。

沼中にうつぶせに死にしひとゆえに地のはたてにひと泣きにけり。

あらんすの兵たちの彈丸ともを敷すわがうたまもひところせしや。

勇ましきわが隊長はすでに死に果てたるのちに戰は止まむ。

わがこころ嘆かいやまずしかれども死なずば止まじ眼に見えけり。

風車小屋ずめぐるこの小屋はわが十三歳のおくつきどころ。

女の児ひとりのけりそが瞳われらとともに眠るものならず。

この小屋の持主たちはさりゆきぬ沼地をめぐりもはやひとあず。

あるあけてとよみ迫るを感じあるわれらはよるは早やも明けぬ。

馬車のおと遠くに去るとききあたら女の男なぜ泣かぬか。

馬車の音最後にきこえ風来る沼地に鳥はひとこゑ鳴きし。

死にてのち古馬の騎兵にせむにいのちをばうしなう頃つなし。

曙近く女かなてて来りけりともに死なむとやがてこいけり。

いのち惜しやかて去なむと泣きしともそがゆえかなしともに死にぜば。

遠くと枝末に風は吹き去にぬやがていのちの時来うむず。

ものおと風にもらて曙をくる生命知らせば寝ねずにならし。

紅まばらかがしにしたる虜女子の髪にたはれし兵ひとり。

いやはての彈れう音のあはさかも頭を越して遠くとびにき。

あなしまはひとに勝れらこのあなしきひとびと死なずわがこのはは。

援軍は遂に来らずわれら十三人、すべて死ねとよ死ねとよ。

濁しかうしいくさにのこしかがいのちいまは即かずず愛しきろのも。

月いでよるのあかさよ地平をいそぐとゆくわれかいのちは。

わが國もとびしとあしかするに淡見せざるも國はわれをわれば。

傷ける馬つぎつぎ倒れゆくぶろあの國いまは回復うず。

集まるのらつぱひびけらいくたびか十三人にいまはもう増えず。

連丘のはたてのかぎり来れるを死骸の魂かつ集まれ。

あくわれら百二十人もて戰いきいまはまを毒つおぼろき。

鴉啼く十三啼きてなきやめぬ。われらが棺はいづくにかある。

戰ひの後の大地に露あかし死屍のまに呼吸あるわれは。

傳令は露を衝きつ来りけりここにと呼べど探しかねたり。

隊長の方まいたに書簡のたもとをみれば命直れり。

"MAR NOSTRUM." (二、三)

銅色の半奥神の躰に薄はかなみいり奥その中にひそんでゐる
半奥神山石にあかつて体を乾かす海の雲ふかぬひるすぎ
海の白この山中にするとそれば峡湾に寄すは潮青年
半奥神ふつかずてきに来る山奥のうす赤いちばし
地中海に喰出す窓岩の尖端から今も烟むのぼれ
燈台なる山島にんゐて耕すをかむすまなる喰出来れば
柳樹と棕櫚の西班牙を望の御殿り海の敵宮にいま
来れまれ独立の謀りごとんなるは山にけむりのぼらず
かすかなる女ゑん者のすればやいまだに文来らず燈台なんのぼる
古代の都市に女が来たれば白い柱にもたれて語しかける
夢草まとの垣のペーキに女達のほのやわらん海の見える言ひ
人間のいのち育みす人間の群れそれに迫てくる黒い影わらつて
弾むまるまも女子ばあれに依らそいるみちのべみにながく
弾も保ちたければ国謀をもすれしかれが言ましも何のねがしん
つれんばらかれ人奥の餌となりばらばらの肋骨を神の岩ほにとらす
仲間の女性かぶまし二つゆうべ暗黒に膠流れてゐたら
三角間ゆれはつた船ゆく海原にあつまるに助つけてゐるなら

サクラ咲めらすしまくに

陽田雲子(陽子集)長野細一(高山茅)

水しもくつたおま一の
星のようだけが見えるまつねな

丘の上の一本松にひるすきは
白い鳩が一羽来て啼き出す

水族館のかうすの中をまの
星がひろめくを見てる

松下武城(大東猛吉)

ひのくれ方のたが来ないで

丸三郎

あの塔のかうすの中に歌がうたいてる
とくのとくのおれまを行てほく達の夏だおもちの威嚇が手に汗ひりついてる
そすの白いペーキの白かいまでも来ない

西山英夫

君の居く西のみやこ山広く広くひと暗き詩のみやこ女のみやこ そこにおきて見れば知らぬ他
口(われは中く何なるおもる、わする、ちかれわれのちかいはあれとけずとも
のでみばつんとまかたし

鍋田ひろし

紅梅塔元(鍋田ひろし)

白西来西青

天之竜々来る色彩(芥子道逸遊)

松田明

紅松一枝

書一藤は風やかかの花鬘

井上楊

海鳴の海に洲立つ天使らん四吹けよ

ある村一

激石の猫に似たりやきみかまみ

善泳青年溺可憐水

花の咲く山はまきに鳥遊ぶよるあそばしよ夕べ(は
武蔵野の人は林の倒木に腰かけきみの言をまもる
風吹かぬ木来に[illegible]のいなまをまもるなら

大日やは東磯に蟹は溺れけり

東郁子(信濃博子)

黄鶴常はば誠の[illegible]の[illegible]ねいは昨日帰いたで

君の肋骨はうすい白いかすり　ヒラヲ
おれの胃の腑は腐った乾酪の臭がする
おれの歯齦は膿んで毎朝出血する
おれの鼻はかくれて喘息を弱んじ有しない
おれの直腸は弱れてゐる。
おれの頸骨は下垂してゐる。
おれの脛骨の曲り具合を見ろよ
おれの頭は一倍重くなってゐる。
おれの歯は人間をかむに適してゐる。
おれの体臭は友を却ける
おくておれは迷惑する（のたれまなき反抗と屈服に
うみ疲れてゐた。おれは今高精神的には
彼をいかみ合ってゐるが体力はもしの事を利かない。そこで
しゃうことなに体戦の状態だ。おれ一だって全人信
用はしまいがこうちが黙ってゐや何ぞに事を果し立てはしない

一九三一、二、七、

李張翔をよむ（詩作えハ、一九三一、二、八）

なのみにした指揮官等も皆き巴里の市は陥服し僕の兵の半ばは敵に
ゆえまれて了った時になってはもう彼奴は国旨の国を捨てた。すく
りなまで一杯の家族に別を告げるとき彼はかいた、各手ある自旨
の戦史を書かと、ゆえたんの島に来て海の自然をた時幼時の彼の
記憶の心はまた再記した。遠年の星は又もや彼の上に輝しはじめ
た、十おしまは涙々と島の建設事業にそめ、又は地図を開いて
果しない宝藏に耽り彼はめんたの勇敢な家族を想ひ、この時彼は
涙を流したとなら僕はどんなに彼を愛慕したであらう

×

世界目の悲哀を十ぶしまたほど異化的に考えて人木もまはない。岡もが生も
みくびずんく目に見えて世界をゆく。果しない古代の[illegible]。昨日は
ヨーロッパの帝王。今日はつまらない。明日は流刑囚ぶんと。しかも彼は
泣かない。

×

ヒヌメ氏師を僕は和平にも愛する。勇敢な業に於ては子
らに劣るのも知れぬが自尊心の強い十ぶしまの見一人の「おれ」と
呼ばれる年であったこと。青春、敗北の前に死んだらしいのが何すり
んとい、ネー、ぺんちゃーのかわいさーなこと。

×

しそしてぺんちゃーも死まだ、ぺんりてはしゃ兵の行進を見て突然死した
彼を除外した心の奇。弱い男。

野球部選手諸氏（二、一〇）

内田義成

お前の性格は男である
おまえさい白いなぞ。でいくじくをおしつぶせば誠がいのかな
まつ黒な性格が流れて行くならお前は世をもう嬉ひ出す。

三浦治

お前の性格は船である
どんなつめ溶かにやけば町中に大がいつぴき急にやせ出す。
捕虫機のかまみたすみは赤毛生える毛虫かこむおまつの海だ

能勢ひえ

お前の性格は猫である
人形の星の白さを語るとも[illegible]人形もつてゆきなば
おこぶとピアノのみ安らぎ白猫を水とおもがいておいたぞ

丸三郎

お前の性格は[illegible]の花である。
ゆめにもれてぶしてしま（潤木花）しもやけす[illegible]がかゆくてゆめ
はらはらと気をもみながら子供見てる電車線路に迷ひ子供を（こくいんのもとかう）

わ林　ひ三

お前の性格は嵐である。
まよ中に明日まで来ない。油火のひかり大ゆらぐ　むかしのをとと
あたいぴは見ないとおもよ世ののは向かのから人に木ばをこうする

友眞久衛

お前の性格は葉である。

とんとんと太鼓たゝいてゆけうしが笑でおま（にゝ[illegible]）
まつ白なまつ白な猫を飼つてるとひそかにるは世に化ける

三島中

お前の性格は竹である。
雪深きお山のおくのたけのこはめ竹なれば人に会はなず
とんとんと眼をまつて物ゑつぼたましの逃げるけはいしないか

× × ×

肥下ひえ夫の性格は大である　或は夜　（二、一四）
屋をゆめば鳴はる日々の蛍い大横町路地は暗いとい（ば
性格の起る来る時尾を垂れて[illegible]ておま（を抜とい（るか

服部百己の性格は新である
ひのすぎて夜の蚊殺しから合むこの山ろあに[illegible]ものこはせず
泉水の鯉はねる物音におま（鳴き出す遠る声かな

潤々と氷雨[illegible]そうして街ゆけば世紀ゆしばしも消まず
おとといの雪は氷雨にとけにけり会るに止まぬ邪念を持たる
うとんそば迷ひて木しお雪之男と寝るか氷雨降る夜を
細木ばからひけねし白蛾のお雪かなしや夢ら木にけうし
この頃はおそしむそもそもからむ　あの赤う類も今は[illegible]せま
[illegible]の中のわるけ木は[illegible]とあまらの男抱いて寝るのおま（は
獣である男をにくみうるにをんよ敷木てりの作をもそば

×

夫夫と富士は雪に映つり 敵機 ふしもためにあらず
憧憬のこころとぶらめ 朝ゆを まなかに見る 大峯ろの凍て
二上の焼け茅原に雪つみて昨日も今日も解けずば見ゆる
ちくさくと雪積む中をゆきたけりおのれかなしむこころもきえて

× ×

× さいさの実の鳴る空
—東京—

× 坂の上から馬のてくる
—東京—

× 宮城の濠に鴨死ぬ
—東京—

× 近衛兵の赤おび
—東京—

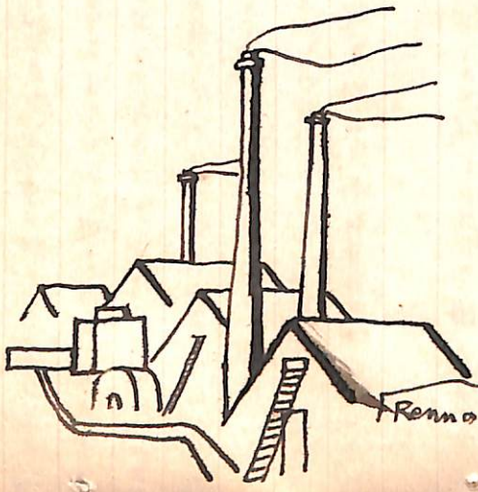
× 本郷 高台からは富士が見える
—東京—

× 労働歌も聞えよ 煙
—東京—

× 九段の燈 自動車 来る
—東京—

× 角帽 巡査に 敬礼 行き
—東京—

× 女 投げキス カレー・ブオーン
—東京—



Renno Krieg とは 2月12日 結婚下 同日 皆和解 現合いる 合図

× 不良少年 公園令嬢
—東京—

× KOIBOY 文化学院 ヤ!!
—東京—

× 一寸生 亀をはく
—東京—

× × × ×

増田正元を偲ぶ

あく 帝陵のわかみどり 野にはかぎろひ うらうらの
雲雀も空にたはむれて 野にはかぎろひ はるとあれ
わかくさ 野にはかぎろひ はるとあれ
わかくさ 味うのおにいるのひとびをくらしはて
夜をなほ はるのてうすきかひろ
きみわかき あくいとどんすいまたい野にみちわたる
わかくさに きみをおもひて なげのこの むねせまくるよひのひとを

× 若草のむつとする匂の中で野球をした
すくめのえんどう かすのえんどう たんぽぽ げげ
日は暖かに照るみた お腹を空かせたね
すいば 水芹 ばな おしおし
よるは 近衛軍の歌をうたつて サンタレへ行つた
〜日出づる国の丈夫が今日戦に出でてゆく
書の踊のうなも きみはとうとうおぼえてうつた
〜さくら さくら 花は西から東から

久米皇子埴生山墓（二、一五）

冬原は羊歯の茂りもあたらしてうづくまるなほひろらの土むし
松原にみ子の御墓を訪めくれば冬日をかくす雲動きけり
まんまんとにごり水をたゝえたる山原の池に鴨はねむれり
埴生山いるかくしてひとかはは道をゆきゆくわれと共とは
群松の木末うごかしつけさやとほくのとよみしまはやみたり
蕭々と陵原に雲うごきとほ山の雪いまはひかるず
かつらぎの流木林に雪つみていんさり光るにひたむかひけり

哀歌（二、二二）

まつ白な岩に包まれ木ぬむりなしひとのむくろはそらに求めむ
蒼々といろかれるそらをみつめてあり誰のまなこかかいやきいづる
千年後きみが墳口ふかれかしくさめむくろにひとおどろかむ
青山のちらばい立てる國原は少かなりしまおくつまどころ
みひかまは少かせなりけりこのたびは生木てまたも冥といるべし
ゆーゆーは独蒼仰げ北山の松の木ぬれに風しづまれば
靡々と幡ほこ立てゝ並みゆけば木のはゆらもたのしとおもの
をとめらはなみだをぬぐひ仕まつれいま大君のはゆらいでます
おほぞらのあんどうめだ彦落七も手ねきみのひとみをいらかせなため

清澄保男氏を訪ね、不在（二、二四）

きみ プラトレンをらうとき
ふのり青空と木ぷうの木
ゆうべらは葉をおとさぬ冬にも

梅咲く
アーカヤ咲く
プリムラマラコイデス咲く
プリムラシネンレス咲く

オスカア・ワイルドとなりて
取廉の獄に沈むはよせ
夕日影送らうとすると。首たれて
木木らは行かう。
みちくのいはかきぬまののまぼたいはねばこそあれこひしきもこと

（二、二七）

梅咲くやわ家のひるに楽の音
恋は感情である
道徳は感情である
中之島公園で自転車の丁稚ーまあたらばかといそぐよ
僕自身をえらく思の日は近所決してない、時々かはいく思ふ
西川の僕を思の程度のなん芸居気のすくい阿呆さ
うつうつとひるをねむるわ馬らのまぐさにはるのあげろのたてら
ひるのひのあるみなかなかと首出してゐる馬もあらけら
人生試験ーなるまら
かるもんの味のかいのためたろ（そ木ぼ山ゆもあ家）
閑古で田舎っぺいをひやかすべい。人間をけらべつするく世またおころ。

バイブルの雲（抜萃、三、一）

我わが虹を雲の中に起さんこれ我と世との間の契約の徴なるべし。即ち我雲を地の上に起す時虹雲の中に現るべし。（創世記第九章第十三、十四節）

視よ彼は雲に乗りて来る衆の目われを見んかれを刺しかつ凡て地の諸族これが為に哭かん アメン。（約翰黙示録第一章第七節）

我また一人の強き天使の雲を衣て天より降るを見たり虹その首にあり其面は日の如くその足は火の柱の如し（同、第十章第一節）

我天より大いなる声あるを聞けり彼等雲に乗りて天に昇れり其敵これを見たり（同第十一章第十二節）

出れ観しに白き雲あり其雲の上に人の子のごときもの首に金の冕を戴き手に利鎌を持て坐せり。又一人の天使殿より出で大いなる声にて雲の上に坐する者に曰けるは刈時すでに至れり地の穀物すでに熟ぬ汝鎌を入れて刈れ。雲の上に坐する者その鎌を地に入れければ地の穀物刈られたり（同 第十四章第十四―十六節）

エホバ彼らの先に往きたまい昼は雲の柱をもてかれらを導き夜は火の柱をもて彼らを照らして昼夜往きすすましめたまえり。民の前に昼の雲の柱は降りたまはず夜は火の柱とのぞまたまはず。（出埃及記 第十三章第二十、二十一節）

ここにイスラエルの陣営の前に行ける神の使者退りてその後に行けり即ち雲の柱その前面を離れて後に立ち。エヂプト人の陣営とイスラエル人の陣営の間に至りけるが彼かたには雲と暗となりかたには夜を照せり是をもて彼と是と夜の中に相近づかざりき。（同、第十四章十九、二十）

暁にエホバ火と雲との柱の中よりエヂプト人の軍勢を望みエヂプト人の軍勢を惱ましめ（同、同、二十四）

アロン即ちイスラエルの子孫の全会衆に語りかぬ彼等曠野を望むに エホバの栄光雲の中に顕れあり（同、第十六章第十節）

かくて三日の朝にいたりて雷と電およい密雲山の上にあり又喇叭の声ありて甚高かりければ民みな震へり。（同、第十九章、第十六節）

是に於て民は遠くに立ちしがモーゼは神のいますところの濃雲に進みいたる（同、第二十章第二十一節）

而てモーゼ山に登りしが雲山を蔽い居る。すなはち主エホバの栄光シナイ山の上に駐まりて雲山を蔽ること六日なりしが七日に至りて主エホバ雲の中よりモーゼを呼びたまへり。主エホバの栄光山の山頂に燃ゆる火のごとくにイスラエルの子孫の目に見えたり。モーゼ雲の中に入り山にのぼりモーゼ四十日四十夜山に居る。（同 第二十四章第十五―十八節）

モーゼ幕屋に入れば雲の柱くだりて幕屋の門口に立つ而して主エホバ、モーゼともいたまへり。民みな幕屋の門口に雲の柱の立つを見れば民みな起ちて各人その天幕の門口にて拝す。（同、第三十三章第九、十節）

主エホバ雲の中にくだりて降り彼と共にそこに立ちて主エホバの名を宣べたまへり（同、第三十四章第五節）

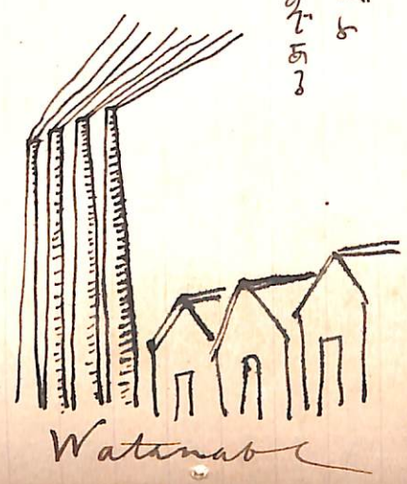
かくて雲集会の天幕を蔽いて主エホバの栄光幕屋に充ちたり。モーゼ集会の幕屋にいたることを得ざりき是雲その上に止り且主エホバの栄光幕屋に盈ちたればなり。雲幕屋の上より昇る時にはイスラエルの子孫進に進めりその進々凡て然り。されど雲の昇らざる時はそが昇る日まで進まざりき。即ち晝は幕屋の上に主エホバの雲あり夜はその中に火ありイスラエルの家の者皆これを見るその進々すべて然り。（同、第四十章三四、三八節）

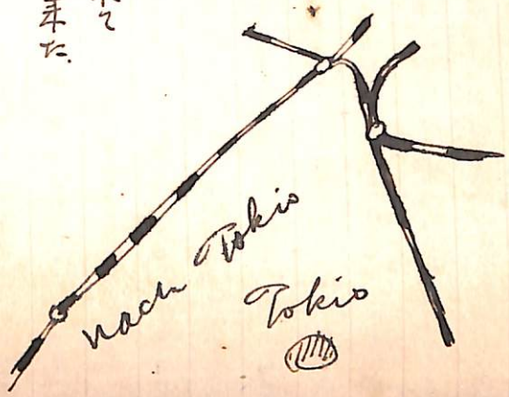
三月三日 1. 高等学校試験終
2. 学校の晩餐
3. トランプ、千年堂（松浦、安倍）
4. 夜鮫軍、碁囲む

4. 保田の云い方をかりれば
魚族の肉眼の感触は青白く秋ら
胃液中で発酵し始めたゆえ
各個体は忽ち生命の流水に溢らせて
俺を悩ます。海の水はここまで差引して来た
俺は胃液中に手をつっこんで
又も生めるい感触に黄民族を感ず
かくて俺の愛船は午後二時に終点なのである

1. 2. 3.
学校終りを告げ
喫茶に味気なし
出目金に情味を感じ
皿の鬼にいらはる

骸骨と構成作用 溢出 擬音船舶
余潮 山の力
月 溺す
あけすけやあなずを剥ぎ去りにけり
もろもろの罪悪すべてを洗みかな





三月三日
娼婦らの甚きを見ん三月の嘆きをとはひとに知らゆな
かくかくと水禽鳴きて去にけり風吹くひるはいまもめぐれる
外国人のこころをそそはるあはき巷をゆけば何でかなしも
えばの見まいるながら道ゆけばはるの国も塩末と思ふ
華奢な時期とはなりて二月るまものにおいえて木の芽を噛げる
はるの生文明もかなしけれ壁はげにける映画のくには
横町の世界をえたらしかなばげ先ゆすわ思ったためなるべし
マントを抑（風いかのいてゆくときは泥あるほど金銭とりけり

× 保田かあのとてあからに
指草要れてこれもわかくと思ふ多くるべ思をたつ
横とこえをすかのすかを訊ねられるはかるためのこなるべ
とんなのみあの世界なはばせのあ（で生居ふもまみやらまし

× × ×
植物を愛なしていまはし風吹く街は歩けない
赤い実をつけた樹の青空に立ばえは幻想ではないかを疑めで
えんなはい動物をいためやうとこいまもこれは気が向らも知らぬ
霧が地平なないてほのぬい光はおあ（の妹を愛はとを思ふ —
おれはいのおれはなったら
中共の海、改造の号
静かなる異形（樋口氏）
ひそやかに蛇素採る○○○○○○
秘踏むに鳥しのびいる○○○○○

三月六日　藤井寺村野中ー鷹神社皇陵ー仲姫皇后陵

あづさゆみ春は淺けど山ぞの梅咲く時にひばりなきけり

はこゆるぐいまだ芽ぐめぬこのひるのあたゝかければ春愁すかな

方々に梅の花咲くは哀

みさゝぎ鳥鶯は飛び鳴くよりなきてあかすしのらし

みさゝぎの堤の苔の青いろの目にこころよう春空に立つ

おほ空に雲は流れてゐたりしが目の見張るまでの天ずみと見たら

おぼおぼと水気の籠る春空に、きみがたまひけのは降り来ゆ

百えにも一度会へば何ぞはも

こゝぬたや梅咲くいろの佛たち

三月七日

山本もまた陰陽師となる壇　紀年を北斗の星の恵　夢によべし

あひるひに白狐あらはれてかの女に文をなげ　おもわげびとに

北斗星改落めのちは新を南極星にむかいすはらむ

乃ちもてわれを担ぐるひとありて二すれも去にこもむけるえゆ

ゲーテのファウスト、ゲッツ、エグモント

（世界戯曲全集第十一巻）

陪塚をまはりてをかに掘りてをかくと鳴りて百人の剣

けだものゝ顔もてる石像ありけ木ぬむりのひとのこころはりのに

タフナー

ゆうだちのたゝまりくらきは蓮の葉

ゆめこころいきづかりあ〜こころなる

ゲッツ

あまりに古きこの正直な男、仇敵にも愛来

ケッケーえんの群に飛込んで死ぬことをも修羅の善にてしすと

善意の塊、悪意の的

おもだかにひるすがのかげ魚つりにけり

西風に花ぶれもまゆみまくれ

むらさきはこの杉あがを残しけり

桜首十ー

藤井寺を去るい当ると（八日）

遠ざかるにひるすぎて雪輝よりも遠くたゆたいまぼろびなば

あたたかきはるのひかりに女苦陸おはすみ寺の梅もさかりなるみず

春日のおどり（一〇）

歌姫となるばかりまどんなとなるべし

長羽根もて舞あべし

てなあとなてゝうたうたよべしたゝくに

ひとりうたよべしはるのうたよべし

東郷の閨房を

この女この陣のたゝよ

ゐないたしとらあんの匂いが

舞いんいろかんば

波斯の国、波羅の国

大食の国　なるそ　おおいるか

東邦

東の方には棕櫚で葺いた家がある
店舗では香油、砂糖、水晶、絹、等のうつくしいものを並べる支度を
東の方では十字の星が見えるとき
異教徒達を照して――
東の方では物言う砂がある、歌う子供がある、
驢馬には角があり翼ある蛇がある。
東の方には幻影の都市がある。
朝日に輝く尖塔を捧げて夕方まで迷うとき
東の方の沙漠には古代の都市が眠ってる
生残った人民はエゼプト語をはなしみいらを作ってる
いつのまにか人達が迷い出て来るさうだ
淋しい美しい姿をしてゐるんだとよ。お金持が知らないのだと。
東の方はいま何が起ってゐるだらう。
あの雲の辺だね。真珠色の雲だ。数多輝かいます
お書斎窓から見えて、柳の林や晩餐さね。
ほうあるあるあ幻想曲。女王よ、あれはこちらのそ[illegible]ちゃないます。

東京（一）

十二日朝七時半大阪発　　さくら
十九日夕五時半大阪着　　つばめ

しらしらとよのあけるときみかえし浜名の湖をひるゆたるかな（一三）
みづうみはあいいろのみづたたえきり江良ゆきの雪ぞふる白くあるは
ひたすらにくおちかぬ旅をしめこは豊橋外れ赤松の山京。
北國へ向はむ汽車は汽笛鳴らしいま春の雪降り出ひにけり
北国の木の本駅おおぼくと共に下りたりと友は語らし
いかまいさしも知らずき白くと雪つむ山の宮からむとは
旅人とうてひ呆とこの時にわたしの人はいのち弱せし
富士の山こ木は黄ばかとあどろけり雪にまつはり時空ト立つ
するかの海に出て碎くる波のいろの青やうしかないまのこころにも
富士の峯の傾斜の美り辺りつくやかて立ひとわれは云ひ出つ
おかしおかし海道下り新うれけるひとにも似たりわがこころは
みちのくにわれは行かむとこの旅を東京にも絵うむと思はず
果樹園に白々と咲く花あってたそかれ近き陽とまりにけり
りんご近くなりぬといって物言の涙くゆき来る街に下り立つ

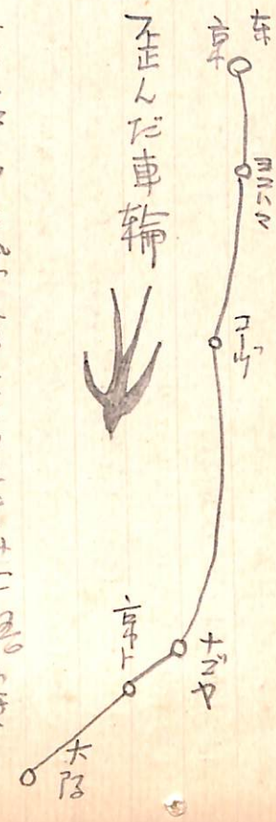
蕗 ブドフキン （一七）

ふるさとの夕ゝ和水の花をこひしみつ
さんらんとかをそぐ映画の光にぬいれば
となりにねる保田もほつと息をしてゐた
おたまじやくしが生れていまだ声も出ぬに
おれとおま（は一つぽしな気で水に浮んでるのだね
橋の咲く東京をおれはきのめいちんち止すきまはう
美しい京京っ子の子供を聞いた、
こんなこころはいつまでもてるかしら
黄色いつばきつしゝだよ、蜂も飛んでる
やがてマロニエがたちまちに咲き出せば夏だ
憂ゝうつな顔をして俺は荷造りをしよ、
ちしあでは復活祭の鐘――
こんなすたれた三重心で東京でも神田のニコライ高堂
おれは涙をいつぱいためて女の子の踊りまはるロシアの
体育祭を讃讃しゝ。
日本で誰が現秋以外で植物の画をかいたかて、
あく植物、赤い鳥、赤い雲、赤い魚、赤い犬
たのを誰も知るまいで

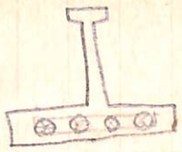
富士 （一四）

下宿の窓から見た不二は
煙草の煙からは少し濃い
小日向台の向ふから覗いて――
あく退屈な。熱が余り高いので
山陰の向ふの犬を呼んで見ると
それでも尾をふるから感じた――
この昼の色は夜になると
不二がかくれてランプ灯が方々につき出す、
あの眼だ、芽を吹かぬ木に星がかゝる
西片町にはあの温和な博士が今夜も御勉強だ
となりでは又革命の話、あ詩人
赤い陽がまはるく
不二が明日も見えるだらうか、

歪んだ車輪



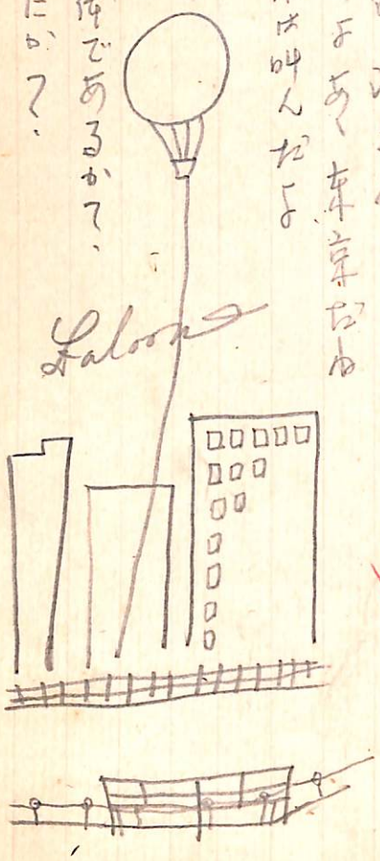
東京をまるかなしみは落第を恐れるこころときみに語りき



Dornier X
=DO.X

京医
湖東次郎
三木利雄
稲葉
川一畑高
小牧信夫
小出正視

不思議の国のみちには
近代摩天楼が並び立ち
新味の溢んでゐるのをみたとき
いつしらずあく東京だね
とあくびは叫んだよ



それは
幻想
の実体であるかて、
あつたかて、

かすみ立つ春のにおでてわかをとめむかしつくしをつみにけるかな
わかをとめあかきはをらをなつかしとみにたらにけるむかしいづこに

×

くみづをさなともだち多校を出づる日にあたら沈丁の咲く
このとしも沈丁咲くべくなつにけらをとめをおもわちまだのほこら
やまもとのはるのかすみのおほおほにわたらのこいもすきにけるかな
春乃すのあまつもたらをとしこにわれをいむをすをとめらいかに

×

沈丁はね 東洋人の匂だよ
舞姫たちのコスチューム
色はなやかさはないけれど
おんとおまへの初恋に
この花の香かしのびいり
いついつまでも忘れない
沈丁咲けば思出す、頬が重くなるのだよ
沈丁 沈丁
むらさきいろのむーかーしの花

沈丁花の香

×

こころいく沈丁白のうすれに
鳥常かず木の枝かるうすれに
わかしのこいをかたりにき

×

けものめくわかうかこいは

Pelo Nostro

Pulano

Moreo

Ostero

Kosmiro

Poccici

何人かの執念の凝り
断ち切らんとするに
あく又しても心のこり
ゆきつかつつあるときのさいかち坂の
うすらあらに何ものかうごめくごとく
あく又しても心のこり

× ×

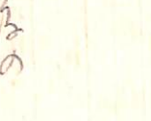
邪念の淵に沈みはてしわれ
をみを思はむことも恥しや
ゆゆしきはしるかにはひよら
なくさめのことばもそれさへに
吾が罪責なるものならずや
陽春のゆ花の
きみがまみに似たれば
この春のよいわれ死につべし

× ×

めえめきて春のゆうべ
女の子、自轉車にのり黒いわ要鷹、
遥木言云へば、その子、うすら笑むと見し
自轉車に片輪、女の子の死屍は
まつ黒になってうつた、
おれは棒立で身ぶるえて——

春雪やコーヒの夢破りけり　山振

春雪や　はつかに春の　まるしつゆ



春雪や　春の雪　薔薇

春雪やそこを気づかぬ出水川
あれもなの机上にあるや春の雪
かかしむかしの物語ゆき春雪鳴る

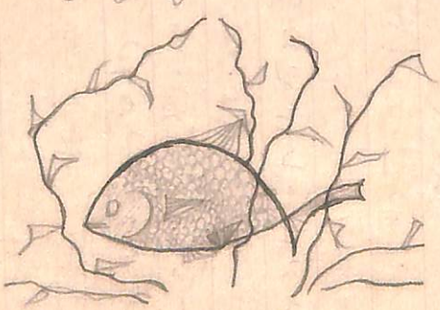
（二三）

まちかめる女の便りかさにあらず
東京とそれを気にして春一日
東京に出もみたら花も咲いたら
からたちやめぶきあめつき蝶の元
それとそれ亡ぶらむのもよ冬の雨

× ×

赤き魚　石南花　躍る目も眩れて
踊りをうつめむとせしかはやあらず
石蹴おこし泥をさぐらて求なんば
男旅のめるめる魚の影を映む
赤き魚つい見えず　淋なさの
この浅沼のいづくにか、かはかくれたる

ゆきはの思い出にそそとなくかるいまのこひかな



× × 四月二日

美しき児を見たらばば
書しるして
苔むしと云ふ人達のことも顧みず。
後をつけたれば
苔の苔も手にもてあそぶつえて
[illegible]
[illegible]のかなとみなさてピの
鍵をすてきくと鳴り出で
[illegible]
苔色の記呼さて春ゆえん一株の
[illegible]
こんはむかしのことをよるかて。

× ×

やはらぶきばらの中よりのにほひのをとめのころに
いまそこにいまさる
いこうとおいたまたてゆばをみなでのまなかいいく
いかずなるぬる
てーいの[illegible]なきことをいつるか成いなかしに
飲みてまもしめも
ちあれ近き老と思へば浮世のうるとらもの層
かきのほか

× ×

いろいろに
あづさゆみ春日きとき、語れもし、野の花は、きみによみりし、
園の花は、きみかへりみず、[illegible]感覚に似る、女[illegible]
[illegible]ない、われはなせと、童心の、われにほこらん、
[illegible]の、花を見よ、し、一手ならつる、色番はいまものこれ
[illegible]春浅き園に入よ、し、きたきゆらは、[illegible]なす、
花ゆに出でとかよ、いまさうに、何でも手をばさへむとさん
や

一百一歌

[illegible]花の春の浅き道ゆき、[illegible]
[illegible]女犯をいとゆわれなればまこの女像を[illegible]
[illegible]つねとせのつねひとのなすことを[illegible]せしかば[illegible]
× × ×
むかし死を男たちころに一人僧をみたる子があった。その子
ばいま地ふかくゆきてみて苔るに訪れてくれる。涙を
なむし手をにむんば思い手だ。だもんなさらおれは彼
の死んだるとなることを[illegible]人。かれをしてそ[illegible]
けるのけて出て来てくれ。[illegible]。けれど土の臭おす
。[illegible]ねえ。

三浦治（四四）

海港の夕の星の明らかにわれはこれむな赤らをとめを

人葬るゆふべもすでに世紀思ひたはけしこころ君は知れりや

あらかの水兵達の並びゆく埠頭場も今はたゞこゝを得ず

黒々と銀河たゞよる汽船の煙もなつかしき

千早ふる神代のむかしうつせみのたゞこゝはちみどりをとめを恋し

をとめはをとこをしたひつまどひものぞいまはなきみめをのこゝろ

こゝしたなはなつかしをとゝをとゝなすわれは易いかすべきいかに

しらつきをとゝなすわれは

衆道は元禄衆の世のみなり、南蛮へ行きたきこゝろや椰子の花

黒船もいまは入らぬ古港、蘇鉄の寺門くゞるや春の月

なつかしきたゞみると便つきたけて、しらじらやよのあけるとき梅の花

船木駅や宝家蔵のとゞろかな むかし思ふ古寺の軒に燕みな

春浅く咲かぬ梅もなき山路かな いとゞか君を忘れき桜寂寞し

傷ほゝ紅の小花ない（六）

繁穂の茂らぬあい

春もたけておにあやしの生れるころは

×

おたまじやくしの尾ひれ、すくて

すきをほる山の池間に弟と兄つ

×

あつ白な二ぶしの花のあとうつに

別れ（四一〇、九時三〇分）

いそぎにゆく（前掲新）

わの木路は宝家がつゞみしどろかな

衆道は元禄衆の昔にて

君が行かば咲かぬ梅も山路かな

夜明け（四一一）

草立る春

すゝ路の江尾の所の朝あけは ひとはひとり立ちるき

河原は海にそゝむとてひるむ夕変えるとあらにけるも

梅の花方々に咲く湘南の湯ある海は見えてみたらき

むしあつく東宮もあけれと思ひ富士の底に雪せるとき

あつまの海の清いむら立て船いたむとひとはとよみし

葉の花はこぼれて土に咲きにけり草木似て咲くこの土思し

せんせと水は流れる山わけふはゆるれて生めかみなしさ

土はのうばゆりの花いまだ見ず青臭きも茅おしこの草は

春浅き牡丹もの咲くべんだ泪あるほゝわれはみなしく

此雪せる不二の富士銀のまひしさを御殿場の移達親ゆらも

湯ヶ谷温

東京の印象（四、一三）　西村に

木の花の匂いを郵の音なは
ゆゝくん音に喧嘩をいと度しめ
けゝけゝとやかて消ゆを鳴せば
いつこにか花ちる風のある

× ×

杉の林に踏み入れば帝都も覚えず
やかて黄昏の風にひとりとぼなくなる

× ×

金の窓はけの於よべし
あした古典の輝きに内は去くたいるべし

× ×

ここにまた泪おとすと友ぞ書き来る
おもての沼は書魚の鱗光の
内めきて消ゆる知恩の鉄光か
感ぜらるる春の初空に相思ひとゝまれる

× ×

ゆゆをのみてもまよはば他口の菩、ここん泪おとす
白壁の鉢のかげにやもうひめき
何とも知れぬ思れ　やかて紙陰は夜まいちぬらんる

× ×

廣東のお嬢におゝ薄ぐ女ゝ
土手のたんぽぽのほゝけるるいるに

いかんものぞく電車のゆきかひゆきかな
新宿松竹座　クリスチナ　ベッテアーマン　白襲
十二日
家を屋を　鳥鳴く木　十三日
十四日
夕雲を青線電車に見たる木は
この二日は山とんかとこの永かりしと感ず。

× アサヒ・カフェ・ブラーリ

とんかの子こひしいとて菊を買ひ何と課の子はよ使ひ
成熟したる女の子の手とは　ゆましいとゝばかり美泪するか

× 街路に草花売る子草花を売る時はすでしかりこと
かてたの灯も見たなしなのよ欲しくなるとき眠の前にみる

× たんぽぽの堤のにんまりひゝとゝ笑いたりとめと怪めき
女子は就学林浮く空まるしこの感覚をわれは愛する
いろの夢に見た就学林の紙もいまこのまし泪こん涙まる

× 木の花のちるる捕けの見ぬば一日衛にみたとは知りき
木の花は清い白へらくらやめに水の流れる光とゝかゝ

× ぶらんこん　ゆうんく　すぶりんぐ　はるまい
さくら、さくら、さくら、さくら、さくら、さくら

der weiße
Tempel

大森（十二日）

ひるまの藝妓はかなしべんべんともうす三味をもてあそぶかな

大森の停車場なる木苺はいま咲きにけり抵抗する力人は

おいその水橋（十五日）

まぼろしの陽は沈むとき二つ三つの赤塔の形ぞ語らつゆく

詩人も感ずるとか二つ三つの辺の夕陽ものさびしけれ

女の印象二つ三つ好の曲つかな螺旋塔ゆく四月のうれひ

ゆうべのくらきちまたのとこどころ白壁の橋は蒼くぞゆる

おもしろい地平も見えず赤ちゃんやのいまのかきとゆうひは下る

こころのがくなげけとならばゆうべやに二つ三つの鶴鳴もあつ

たわやめを買ふすべみたるこのなにわは秋蒸ちんたくなし

十三日 三浦沼

十六日 西山英夫

十六日 西山英夫

初めて塔業を表せる（十六日）

西洋史概況（抜粋 教授）

松浦悦郎氏会つたかつら（十六日）

ちまちから眼いたと感じたら目覚めれば桔の紅く咲きたる

桔の花咲かぬかと知らと思ひきる抵抗の窓辺ゆく。

木とわかぬ雪をきて帰つるに思ふはくいと悲おてんけり。

まよ中の帰まん向い風をするけだものどもは吼え去りにけり。

わが旅はいまはじまるあにねむらるる安けさ感じ[illegible]に星空をゆく。

ちもまちわれが眼を新鮮せし桔の花は戸外にかかんら

名所を巡へるまは（十七日）

おいその水

西屋に人もの[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]に白い鳥むらがれら

ひんぷとお塔の水は白いけり夏来るときかなしくなるむ

木の芽みるかすみにほよ春の郊外をゆけばいやにかなしき

十字

おいその水

ちんぽぽは女高師外の堤にいまはほけめ女去て入るべ

無塔

えまんと水をたゝえる噴泉としむかし江戸の城築きし人

柳芽ふくお濠のはたの電車道 白ずん去るいく年ならむ

京都の帝の城のお塔にはおたまじやくしもをれめなるかも

白木屋（紙屋）

三越（家所）

ふまえ古代今われわれ[illegible]はれしに名をえる（行ずしまい者（行

もろくのの草揃して抵抗おきしいなるかの山なつしむ

晩春のつくしの花もなしけれ抵抗の窓さんつまにけり

句京草買ておくらむ人ありなどの女学ありこうはおるらむ

晩春やわれもむかしは三十年（一茶に倣ひて 松浦悦郎）

山年ぶりしまろやつ今の花

山草は苦に咲けば買はれけり

弱い陽のかすしくならば藤棚花

春海に盲亀浮かれ書の月

三島中 西山英夫

保内来る

十九日

今日は君と荒川堤散歩！

潮干狩り汚き街を出外れて流れのみを見るとはなるかも。

×

荒川堤

揺咲く荒川土手はうすげど

河原に草は花咲かずとも

ゆく春は荒川土手の花菖蒲 かすみに春しつくばねのいろ。

つくばねのおてもこのもに揺咲き二の春風に散りにけるかも。

あつさゆみ春はゆくゆえさみしらに川下る船 目もて送れる。

もの思はずいたに眺かば東京の郊外にあることすでにはかなし。

これはさびしさであるか、いまいま さびしさではない。

さびしいことはない。いのちいきて何のさびしさか。

×

けんぽう草の花の咲き 木の芽ふきのかすみなる白を立てるとき

おまえはいつも暗い顔をする。それは淋しさでなくゆうつでなかいか。

いなかの淋しさでなく、ゆうつでもない。それはお芝居である。

お能の仮面と同じく無表情に上れば僧は面をつける。

それないけないのだよ。誰もそのお芝居をこなしてくれはしない。

見破られるのあるのあらはしない。君は[illegible]がこのひとんみんなを

見んなと思うのか。

こ春のなしや孫治に惚れて孫治もかなしやこ春に惚れて

何かなしや相ほれならば。やれ相ほれならばかなしとよ。

丸山

二十日

JOUS MOUS PROMNÉ !!

1. 芝公園、増上寺

品川の海の見える墓山は

西向地蔵尽きますところ。

うつうつと春のゆくことかなしみに

うえかくうとにゆきにけり。

品川のお台場見てる夕べ木に

流船のおてゆくおとでいな。

海鳥岸のたかケ浦止場あた

見ねば、

品川台場に波よる夕べ。

房州の津は見えずけり

うすくらく流船の煙花咲く陸か。

埃立つ芝公園はつまらねど、暮れてゆきし君思ふかな。

2. 金地院

金地院に夕くれとなれば女の子縄飛びにとぶ、揺ぶるかな。

3. オランダ公使館

オランダの旗を見るなら赤、橙咲くこの春にまたも来るべし。

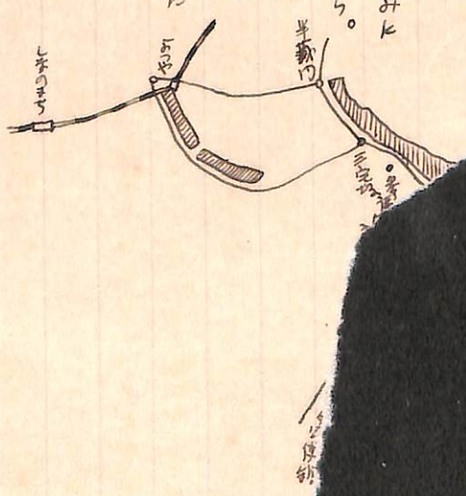
オランダの国旗は既に下るとち花ちるくれのしづかなる館。

4. J.O.A.K.

空中に電波いろかるをたしかに見る。ぼくは、近代電気を習ひたければ。

アンテナ

送電柱の高き所に力を感ず。これは近代なるだたしかに。



赤煉瓦の國に来て緑青のふいたドームを見ると
おしたな感慨を感ずる。
これはおれの父祖のおとろへの遺傳である。

×

王侯の子孫と机を並べて勉強。
夫れなの子孫である俺に何の卑屈があろう。
あのじんでりでりの朗らかなドーム色に
王侯が何の関係ぞ。封建制度を破壊した。

×

昔利の國に来ると思ひき霞ヶ関の七草樹の並木は今も茅ぶきぬ。

6 横田内

三月の上旬の即句 雪陰ふ所又も道弼ここに殺されむ。
雪の降るしんしんと降りこむ濠に忠弼の首は今も沈める。
中く春は来ぬ濠の端の柳の芽のほほけたひとびとの中なむ。
濠向のお城の上に春来ぬ退屈しつゝわれも見てゐる。

むらさきの夕焼雲は陽を受し横田内にわれはみるなり。
濠端の柳の芽ぶきやはらかしおほらに泊りて電車曲れる。
塔立て白亜車は既に出にけり霞む柳の並木の長さ。
まつ青な濠端の草に春たけて戸開せる[illegible]館お城にはある。
新議會の向山の凹め砲ねしけれ陽の水面に果てくかなし。

7 [illegible]謀本部

江州彦根の城主井伊掃部頭のお邸は今もあるなり[illegible]戦を謀る。

山吹の咲く夕暮に物思ひ人なる立ちまれ泡の湯かめ。
山吹の咲く木の蔭の袖たつみ光りゆとは春のわ鳥か。
山吹の咲くころとなりころころの蛙の中田もてほしまものを。
山吹の花んのあるむ向岸の木くれとしてしみ見るは。

一鳥無啼山更幽

[illegible]のくれはしじにたりけり鳥啼かぬみ山は更に土ひしくもあらむ
[illegible]の木魂の詩

木魂[illegible]深山の

富士山の見える原っぱ（四・二二）

あはさゝ木たちにこゝろ[illegible]木て富士見やはらぱをゆ雨[illegible]の土
[illegible]さゝ林の奥のわが宿はいつしかよしと思ひけるかな
[illegible]の林の中にしてすみれの花も咲きにけり、くぬぎの花の咲くころは下草をなす[illegible]鶯
花の、[illegible]、おもゆゆ、[illegible]も探めまして[illegible]
[illegible]瓶の水仙白いもて今日山草を加へ入れなり

丸

「死」おまへはお木の手許でもおまへのいのちを誇るのか。

「生」ええさうなのです。私は輝きを誇らかに今迄すごして来ました。おかうそれを失ふ今となっては、その輝きの追憶に耽ることが、許されると思ふのです。

「死」おまへはお木の終生は輝いたなんて言葉を使用しない。永遠の泥沼をかきまぜたのか。

「生」ええ、何故に地上にあって、お木ほど光り輝いた生命をもつのか？　厚い厚い夢いのです。それはあすこではいくらもころがつてゐるものです。切れもそれの夢いつこそ知らません。私だけがそれを知り得たのでした。

「死」おまへは忘却の河を渡らなかつたと見える。

「生」忘却の河。いかにもそれは渡りました。でもそれを渡ったことを生へ覚えてゐる私がいのちのことを覚えてゐたって何で不思議なことがありませう。忘却の河で私はまるくの事を洗い流した様に思ひます。しかし或は何も減らしはしなかつたかも知れません。それほど私のいのちは強いものでした。あるがままのものでした。いつまであたることを、それだけは忘却の河でもそれをはしないはずでせう。でなければ貴方のあるべきあなたの裏へ（こそそれ自身）おまへの味をなくなるではありませんか。

「死」おまへはお木を不思議とも思ぬいた。しかし何ゆえお木は裏へ（まやなのだ。そのわけをいへ。

「生」あなたは地上ではあの命令を下してゐます。それは私の名誉をたかめる意味なのです。地上の人はあなたの手下を幻想します。あなたの手を鬼骨の手だと表像します。あなたは蝙蝠の翼をもって、引導時に家々を廻らせるとあります。

「死」お木のことを何とおまへ（達）は表像しやがると嘲笑だ。しかしそれはたゞお木の冒瀆にならはしないぞよ。

「生」いえ、そうはなりません。只それは生は生を表像することにおいて自分の裏を一つ増すだけのことです。

竹林の三日月（四、二三）

丸三郎と今、家に来る。詩、語、新家俳句

夢語琴弾く弦の竹林に細き月出で曇に落ちぬ。

三日月の鋭き光西にあり竹林黒き旬のおもよる。

丸三郎とひるまぬたらし竹の子は三日月の弦にずんとのびけらし。

花火を上げやうと子供がみるは
東京の空は海のやうな深い色をして
深大寺の仏殿の沛然と鳴る軒のあたり
くぬぎの葉の木下るこの夜のよるは
浅いなるの雲に東京の灯からうて
深く深く息つけば
あゝあの牛蒡ん咲くはあの花、日本の
杜鵑の花も。

× ×

抒情詩を作る子供は僅一人
大人で抒情詩を作る人もある
植物の可愛さに三越に行った子供は
果して女の子を恋愛しないであらうか

ゆきの春を見よ

× ×

ちっさい春は早けで青壁に弘勒の像をかけて。ゆきしき清
ゆきは弘勒菩薩のおん眼われか女犯を自覚のたまへる

× ×

「死」何故さうな言葉をお前は使ふのだ。その言葉は俺に不愉快を感じさせる。それなのにお前は生命の範囲に入るものだ。

「生」私はそれも知ってゐます。とにかく私は他の地上の人達の様にはあなたを想像しませんでした。私はあなたを知り得たのでした。たしかに。生命を知ると同時に。私はあなたを地下の神とは信じませんでした。あなたはあの雲の上にいらっしゃると思ってゐました。そしてそこで私は今あなたにお会ひしてゐるのです。

「死」さうだ、そしておまへは雲の上がおまへの想像してゐたやうな光り輝くところではなくてじめじめした泥沼だったことを今始めて知ったのだ。

「生」ええ、あなたの推測は大体合ってゐます。しかし私はそれでもとしていつも考へてをりました。あの光り輝く雲の上は或は最も光らないところではないかと。何故なら光を最も要しないところからは最も多くの反射があるわけですから。

「死」その光りを反射で見破ったところはさすがだ。成程こゝにゐて不満足なことは自分の光りを持たないと丈位のものだ。勿論おれには光はいらない。おまへ達にとって光る必要はありはしない。のでも見せかけ丈においてこゝは空虚なひにまとまってこの空隙にはゐつるからな。

「生」ええ、

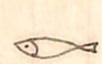
おけわ僧に海の魚もえす様のこころまかせてなうしと云へる。

おん君は小木を見捨てゝゆかれ空しく海に嘆きを入るべし。

鴎とべとべ波立つ洋に

けふは海龍 空に昇らむ

さいえの殻もそそぬべし



冗談をまじめな語にまぜるのが僕のくせだと云ったひと感じた人は外にもある

小林正三、三浦治、久保健太郎、西川英夫、最後に柏井信子嬢

これしりは貴下の妹えう子さん 三千世界をさがすとも

無間地獄に陥つるとも 契らでやまぬすきごころ

（おい冗談をほんまにするな、今日は丸ん大阪弁を使はしてもろた）

夢。　（二二—二〇）

第一の夢。

私は処女（をとめ）を抱き、霧の夜の木犀の花の様なその唇に接吻した。処女は体を横向けて、泣きに泣いた。

第二の夢。

私は結婚式に列席せねばならない。私は花婿であるから。

小い私の花嫁は指輪のはめ方を知らなくって、私は私の第一指骨をしやぶくって私にきいてる。

第三の夢。

空の向のおいベッドをぬすみ見る。

私は可愛い馬を持ってゐた。影鼠のいい、眼のやさしい馬で
私が指揮をあてるとぐんぐん馬はけります。
馬にのるのはたやすいなと思った。私はまんまるのやさしい眼を
覚えてゐる。

第四の夢。

私はあい棺を用意した。私の花嫁は死んだのだ。
棺に入れると陽炎を花でうめた。芝木から川へ持って行って
小い舟に乗せて流した。
青い紫檀と笛を吹く信人の群が芝を追って川辺を歩
行った。私は私の花嫁をも一度見ようと家へ引返した。

（二十九）

芝生をわけて私は道を探した。
芝のうわべは私の笛であった。
蟹の這う泥の上には蟹の足跡があった。
夕べ方は潮が引き泡立つ音がした。
芝は潮と潮のあいまに延びて行った。

（廿六）

苔をぬすみに来るやはの夜
薫ゆく山の麓はあくまでは
山吹も深き渓を遡る
階や苔長ちらくる空にまで
あけんとはくぬきの花の短かくて
もみの木の芽立ちもあはし湖のいろ（一首・イタリア）

このゆべ山かんの実をくひつくしゆ鳥は空に飛ぶゆきはけら
ことらのとびかう空に陽のいろのひろがりつくし天雲となる
ちくぶねをけわはしくしかば人をみまし山の吹のをなつかしむかな

Lied des Harfenmädchens

Heute, nur heute,
Bin ich so schön;
Morgen, ach morgen
Muss alles vergehn!

Nur diese Stunde
Bist du noch mein;
Sterben, ach sterben
Soll ich allein.

Th. Storm

並み伏せる青丘のあなた
角笛吹きて牧人ぞ住む
あく希望抱きて牧人ぞ住む
陽の出づる朝と言へば
小屋の外に紅き苔子咲き
夕べ羊を追ひて帰れば
夜薔薇ぞ白し
あくまでも希望をもて
牧人は出で入る。旅びや訪めて
あくて年々。牧人は家畜なみ
年ごとの希望はいまし
ちちあるか、居士はあれ
山のかく訪めも来ぬし あひしびと。

Über dem grünen Hügel,
Da lebt ein Schäfer,
der einen Wunsch hat!
Da blüht rote Blume,
Im Morgensonnenschein;
Nachts, ~~da~~ lächelt weisse Rose,
Außer der Hütte Tür.
Warum wunscht er noch anders?
Geht und kommt, irgendeinen wartend?

僕の肉体をほんとにする奴がある。
ここに書くことも正気でないことを知れよ。

書の月　盲亀浮木に会ひにけり

量を忘れよ。

二十七日

毎年牡鵑花の咲く頃にはゆうつになる。どの木も皆新芽を出してそれが精力的な気を吐きかけるのだ。おれに下等の土つまの花の紅さ。
昨年は僕死ぬかと思ひ死を思ひて京都の国行を思ひたった。銀閣の雨がうるさくて死ぬのがやなった。国行の歌めし力をつけて来た。僕はこの時以来国行を忘れない。いまだに高木まい。
そして今年もとつまが咲く。以前のくぬぎ林に房の花が咲く。陽の光が白い。
死んだ博田が羨しい。可哀そうな博田が羨しい。
生きてる甲斐がない。死ぬのが一層幸せ。植物が憎いのだ。可愛がるから
よけい憎いのだ。青線から見る。代々木の土堤の土手の花。土手のとつまの花。
そして宿の以前のとつまの花。

李佳田氏。
兄貴の好きな二人は別れてから
お互につまらない話をしてみる。
俺達はかばることもなかった
かくすこともなかった。
おやみとお以前にくっついてみたのだ。
四季道はいやがれ木ひ女犯もそれに勝る不風である。
母親はいとけなく醜さが目につく。他人は愛しても足りそうない。

いうなれの吾手は妻であった。お木も男のそんなことだろう。
美少年に生れたのならもっと少しおれは悟ってみたろう。
体が強ければもっと押しが強くなったろう。
早く故郷を出ればよかったのだ。いつまにかおれは自分事を告げる癖が付いた。
人の悪口をうめには神経の柱が要る。おれはそれ苦しで遂に一悪口を吐く。
おれを愛しそれる奴は軽蔑してやる。おれを憎む奴は殺してやる。
おれは玉揉んで生れて来ればよかったに、どうしても手は肉ちがつてる。
あ、ピアノの鍵盤を叩きたいすべにおれの騒音がある。
社会の新しさその瞬間々々にある。革命は早く来るべきである。
近代弁証法は唯物論であるから僕等ロマンティストは時には困惑する。

此止場に毎の蕾と如く。
女は結婚を目指してみる。
それを知ってそれるけれども
他に恋ひを持たないのが奴等だ。
しみじみと可愛そうだ。
おれはフラワを愛してやる。
蒼ん雨の降る如く力が心にも雨が降る。
まるで雨は降る。まるでのつくんんい降る雨は光らはで
瞬時も止まぬ。今新な知慧と中西の無知に困まれた
おれの心は後悔の雨が力止めもない。つまらぬ弱さ仕ってあった
もう仕方もない重だ。力説を書くも驚愕金が国に帰って
なるか。あく雨だ。しみじみと雨。日照り雨。

二十八日（火）肥下い寄る

僕は保田と肥下と明部とで銀杏を拾った。明部は新文から送ってもらった三角を焼き明を作りに行った。三角以下の明は無かった。明部は六十四の明いした。かいまると僕は保田ちゃんとこの家の花をちぎってやった。保田はあてずかとうておっかった。肥下はひとりなとうてちょっと行った。僕は保田はんちゃを作れとうった。保田はオマ（コリとうやまった。僕は気に入ってあるくいうてやった。

XとYとZを足すとZでわる。

二人に意味があるか、十切ものめ。

×

このごろは人が殺したくてならぬゆえ
小刀等は家へおいとき。

×

世の中でいちばんえらい奴をこうし
おれはゆるゆると首をかっきる

×

ブンコウ町の世話も遠に
今日ときて、京れみいめる人間を廃す。

×

カオカオと鏡をみては気づかう
頬のほくけは遠にかくせず

武蔵野の杉の林に月さいて
その近しいかの仏みな

遠畑る武蔵野の国の杉原に月あかりせば何かせんとする

二十九日（水）丸の家へ行く。

熱臭するたなきやみ夕まぐれ縁にさむさはまちけるかな

熱日の喜鳴くゆんゆんゆんゆんて二雨ある縁たすもに時すぎしる

雪畑の向かの田にころころ蛙のこえのしげきよひなり

細雨武蔵の木々にしげくして若葉のあほう今日は至るべ

三十日（木）丸と散歩。

秋文鎮はるかに見えて山麓に雪残るも見ゆる日を遊ぶ

多摩川の河原をいろいろ上げ水に投げいれけるはすかりとす。

すべるのあるときとき開きまし武蔵の国は来たるなり

柏物をいたびもとり拾てにしがかなしみなりと友も思はず

車夫の世間の八十とか柏病院にいるはこのせず。

君が墓に女の柏をみるかな春のみ園にいま歩み入る。

柏者らの入りこもる杉の林中まいるはたけて鳥鳴き入る。

柏物のおのおの咲ける林に入り幼年の性想語りしも。

御殿のほうにかなる西の方なるぼる樹はまるるを見ゆ。

丘の上の柏のもとに昇りけり風つよしとい雲を見にける。

あまつなる日は雲を入り松風をあつとといて丘を下るかな。

血のいろろ紅きつしの花蕾はこの春空にいよいよ輝けし。

むさしなる古国魂の神社のけやき重木は採野光はなりなれ来る。道の果てに

かつよ人な

春のみた新木林の下草にゆる光をこのごろ言す。

柏物の咲けし花の光りゆる林の中の国をは見ひらか

メーデー。

胸一杯に迫り来る。
やせおとろへた老車掌はもはや労働歌も歌へない。

×

すつきりと女の群がゆく。
そのあたらしいメーデーの歌に泣いた。くく。

×

二千からお冬の待望する革命の労働力が
擦つて来た青い群

×

あご紐をかけた黒い服を満載したトラックに
あらゆる憎悪の矢が投げかけられる。

×

アドバルンがお空とお冬の目の前で
二人の学生が捕へられる。

×

團結せよと叫んだ瞬間
サッと逃げのいたニワトリの如き。

×

お冬の特徴のある顔は
口惜しさにゆがんでゐる。[illegible]

×

暮れかゝる上野の山にはメーデーの[illegible]も[illegible]し

メーデーの帰りおかの石段をおりてゆく群のつかれのしるさ
階級の戦ひをおもひおこさびし。かの階級はいまひとつ[illegible]
様の芽のほころびそめし上野山あかるきもりに人集りつ
古き近代完成にめも思ひメーデー見むとわれもゆきたり
メーデーを見むと集ひつ人々を監視巡査の無精髭もさびし
のどに布まきし巡査がおだやかにしてもさびしきを見

五月二日　上野博物館へ保田と

夏の光すでに来たり噴上げの向ふの路を女学生たち来る。
噴上げは高くのぼらず女学生の子供エプロン白し
ゆりの木とかえでが若葉して樹の芽立ちやはらかにして水滴を落す
やはらかに空も澄み来て向ふの丘に画を描く人のあるらし

×

×

胞下とFRAU

おまめ匠でツネカのつまらずあらけしばしばして術を使ふす
ここまでに[illegible]見せるにゲツネオおめ匠ことすくめ[illegible]を
ツネオのFRAUきはで美なる[illegible]を知らぬ[illegible]して[illegible]
ツネヲのFRAU普通の女であらしさをもし[illegible]の[illegible]も
お冬があらしてるといひとりてせ[illegible]けりしその子の顔を[illegible]見ぬ

×

×

武藏野補遺

[illegible]のに小さな家を作り上げし丸の見ず[illegible]は[illegible]気[illegible]
むさし野の小さな家に住ひして己れ[illegible]人の[illegible]人
ころころの蛙の声も愛でぞするむ人[illegible]を常とする人

みくて居ゆすらいよよ葉をまひしをゆくをはつまらぬかなれば
青葉せるはやを並木はやうやくをて[illegible]白きみち[illegible]をうかがうれある。

× 井の頭

女の子らのひとりしが井の頭かてては　たいしをますことをうしか
井の頭をつまるをもはをいしかど杉の並木に女らゐしよ

五月三日　保田来れ。荻窪マデ散歩。後ろ嬉ゴロ、圧迫ヲ感ズル話ト。文ニ

青四日　西原金澤ト神楽坂散歩。既ニ疎遠シ　西垣

日本人デハ[illegible]ヲ感ズルハ
電車ノ中デ女ノ児ヲ見ルトキデ
物ヲ言ヒ、色ヒナ男ガ傍ニ寄ルカラ。
勿論僕モ注目ノ眼ハ放タヌ。
僕ハ年中恋ヲシテ、年中失恋計リダ。
之デ得意ニナラウトシタリ　死ニデ了フ。

× ×

岡部ヲ奴ハイケ好カラヌ。

六日　不滅の旅泥者を御覧。
幸之丞来る
七日　風邦。
夕山木に寄り、深い寺内を
[illegible]
七葉樹のををマロニエとその
大きなのマロニエ並木芽出をろひ青まつをいつかも通る
佛蘭西にゆきたとをいしと友達はマロニエの下、皆元びゆけよ

まつ四角なのハデラゴの角々が
多に寄り、我々を押し戻る。
土は圧迫だ、弾圧だ。
我々は胸を膨らせあらん限りの声をしぼる。すれば
深い四角な谷間の方々に
窓を開けて我々を見る眼がある
それは漸次増えるであろう。

× × ×

山に昇りたいとぼくは独り言。
杉の梢に雲がかかってる。
平地のここは暑い日ざし
しかし明るさ、一寸先
あのまぶしいカオスは見られない。

× × ×

かつて文化の栄えた地方は
今は荒廃と、
裸の山脊に陽がたまってる。
今昇って来た今水蒸の片側は
紅葉で彩られてるために
ここははかない墟ばかり。
弐鳥が飛び舞ってゐる。

× × ×

山を行けばつまぬ野草の朱実かな

蟬来るや百日紅の初芽かな。
一刷毛は空にはかれし雲の片。
熱帯の百南海枕室広し。

海原に今は夢も深き上れ。
黄泉や沖の島低き南風。
南風に櫓を早めて浮かし。

海珊瑚

海は今なほ陸に向って泡吹き、膨れる。
海藻の作業は三月に葡萄と近行し、
やがて深海は白浪を吹き上げる浅瀬となる。
海藻眞紅、岩礁白、とりどりの海樹。
波はおんくと鳴るのだ、ここは。
鴎の巣がやかましい。

（七月深更）

× ×

海はけのも荒れたり水脈木の花展深かせ霞船帰る
はるばると沖の浅瀬に立つ島は陸にはよらず日もくるるかに
沖つあの小島の磯に小さ舟海にやつれてけのもある夏
沖の辺の小島は暗しいにほき家一軒にもの乾せる夏
青湖に奥旅ゆらめくこの海に人沈めるをたしかに信ず
海に水神住むと思いしが海行かぬ理由とせよ
青波にけのも深き海の深の何處かの岸に流れ果わらむ

× ×

コロニエの並木の道の舗石のまんもいたし白雲宮し
夏の気は巷にたゞよひ海の四の原の
丘の上の時計台の白かに雲立ちこの緑の丘は高しじ

× ×

無言の日曜日。今日はあの日すぎ日
駿河台下の深き谷間には
深海魚にも似た黒い雲がある。
その深の中に何は考えて人がある。
その雲波はあれは全く何を考えてゐる。
紀香の並木がはんまり暗い。
あれはいそがん人でぶらぶるばかりなんだ。

× ×

深い深い緑の森となる。
植物の王國に僕はゐて
一番高い樹の頂を指ゆ上げる。
その木は手をもし美伸べず
その木の葉を頼をしてゐる。

× ×

宮永山が出くなるとの噂が
はんとうでもすれば弱るのは
ぼく一人ではない。
ねえ一の不二山の国ともさん。
まーて古い形式美の朝はさんが
ぶつぶんちゃへ。

× ×

月給の話をするのはぐちやあるまいまあ。

五月九日　晴　初夏を呼んでいる。

大学、海の師弟達

大学の師弟はもとより、あまたの海の子らを呼ぶ

大学はんこやいんばんなる賢人たちである。

後者は前者の二十倍、嘘のない証拠

西夷合衆国、新天地の木々を大海へ帰す。

夜見る桐の花、街灯のもとにねし、

桐の花　夜も咲いて　美しい花、

青い青い森のしげみに光る小鳥の羽根、

ソクラテス　プラトン　アリストテレス、

こんぴらの宮　宮ばいみ　知らず、船のにおい、

むかしの女の人来る　話に木の葉は繁み、

お墓に参らう、昔が深いときに、

闘士、闘志、

こうこうはいえ　桐咲く　桐を見る。

雲かな、木は一層輝く、

紫の花ものは　今　他にあまい、

京都の大学　中学　行ったら。

めくらおい、そ木も　昔の

主人いな　今は今、新しい童はね

女の児に　思いちゆうぱ

逢ひたい、　まろ　会えと

すのかたに

學難成

五月十日　ルンルン　ヨセフ、フォスターパーラのモロッコを見たことを忘れた。

マルレーネ、デイートリッヒ　ケーリー、クーパー

説明　塞外の地は沙漠にして蓬々と吹く風に砂まじる植物の

牛馬の一群に鼠吹かるるあら、兵等喇叭吹きて行けば

飛い散り逃る、女等の啜泣き、

漢の圏外の地にも詩はある

和聞弾を出せば漢要通ず、

初めて見る青海のいろ、雲の中の山嶺、

沙漠の半ばは人を恐れず、

撫子を家は知らず遠い鈴は遠響きする。

蒲桃の馬歌　史記武帝紀大宛傳　漢書西域傳作此歌

天馬徠今從西極。經萬里兮歸有德。　承靈威今降外國。海流沙今四夷服。

五月十七日　唐の帝　戦を祝る。

かく深き各国に輝の　こえいりき

武士の矢　言はげし。

白雲のいでるところ　山峰の間の

まひのかたちいまゆん　近し

ところ　ひろく　信ずるか

木のかげ　いやすらぬ　ぬとて

流れる矢の一筋は　防ぐすべなし

なおいまも　傷き　あれ

ひと馬もまた　伏せ

炎熱の合間の　沙に

けだものの　肉の　高鳴ちはうくと

ひろがりゆけば　いまは　耐えず

孔雀の　合はなてけるもの　一人　残さず

月夜の　光の　知らず　国とはなり。

かはず鳴くむさしのくにのくぬぎなにすらん。味がば
この國の果 毛むぢ剛きて女なるもわれにをしかむ
かくなれば都の中の峡なす深き谷間を郭々に
いやまおよいて死骸のひかこばせし去るにまをいまをしで
なにかのみうむ

反歌　　詠遣　大東猛吉

銀杏の巨木は古木、といもいつも美しと愛おもる人なし

みなみの山鈴丘歌は箱根山いゆきこえゆき
宝永の山も消えゆる富士の根をなかむる野辺に
今は住み、かなしきかなしみごとも世ちらと西の都を
思ひ男あにはなとい恋しい身も消えぬべし感傷心
も果てぬべし、今は古木歌つくらをらず。

反歌　　詠遣中島詠二

たわけたる歌ばかりつ歌ばかりわかこひのときすむさうにけり。

かくのみにきみが嘆の東にわが来てこを恋しまむ
かくなるは宿世の去めいまさらに嘆くとしも
西なる富の都は五月雨の晴き夫にとびのなす
つばさの群も森の雨の曲げき夫も細みちも
サキも神の杜、林なってゐるとき もしもきのふるき
こころのなかこころ きみがまなかにかおるむと思ふ。

反歌　　詠遣　西山英夫

かはつをく北白川の坂路をいきさちりて男子欠しや
大ぶや八瀬や、鞍馬や、さいしょ[illegible]
中雨降る住の宮に出立てあの晴木間を眺むれば
都をめぐる山々は一すいみいろのむらさきの そのいろのそ
語りつげまよ。

反歌　　詠遣　平住田昇

うつしきみやこ女の一人二人小に残る旅のちぐさに。

江東は[illegible]雨降る。河岸の遊りて来るか、うらあしと
なく人々の涙もるか。

反歌　　詠遣　友安久衛

いまさらにいんとうのふちやめなきに ここは上野のメゾーの歌。

五月十八日

深淵や毒なみの山族、色濃と松
見上ぐるや今るもかはらぬ桐の花
しんしんを花粉の呼吸のかてしてこの林に人疲れたる。
も早時はまお中なんばいたいたと星言かな消えゆく間ゆ。
むかし見し山花もいまは松木つきし、かの山原の主ちはしげし。

エミイル・ヤコブス　嘆きの天使　八イエリ巳マル原作
たけ木の上まおはずに　　反歌の声。

五月二十日

文平さんと帰る。

なぜ[illegible]

1. くぬぎ ―　　植物連鎖の一、

くぬぎの林は[illegible]

小鳥がうるさくなくこと。

若葉は[illegible]

細い花[illegible]

[illegible]

くぬぎ林の外では[illegible]

くぬぎ林はまっくらで暗く、

ぼくの頭の上にあるのだそうだ。

2. 杉 ―

杉は昔の石炭紀の力でぐんぐんと伸びる。

真直ぐな道具、のこぎりに把握力、

杉はまじめに男女、やっぱりまじめに咆哮する。

月の夜はいっそう黒くなる。

光は凡て吸いとって反射しない。

杉は男である。白合者である。

3. 百合 ―

二本はお後ちゃんの好きな花である。

こいつはばかにおすましで

おしゃべりな女である。

女にとってはすすすとしゃべるそいつは同じことだ。

静かな園に咲いてはおばさんのまみだし、

暗い林に咲くのは自分のおしゃべりで見つけ出される。

欺瞞の花で虚栄の実を結ばずして誘惑の根を太る。

こいつは始終百合者だ。

4. 昼のある夜に咲く花

お木がかうこいでいすと

昼の花がてにとりすまして

自分ってな顔をする。

誰がそんな奴に目をけるものか。

昼のある夜に咲く花は

暗い夜には咲かない利巧さをもつ、

書いては茎がやせたをもつ。

泣いた様な顔もするがその時はまっしい。

(泣顔のきれいなのもある)

昼も見つめては叩きかきすぎはすまい奴さ。

そんなのも昼がいっぱいあるよ。

五月二十三日

5. グロキレニア ―　植物連鎖の五、

女王様　今日は霜月の十五日でございますげな。

成程　宮殿の花も盛りなわの。

一寸、王様　気晴らしに出てらん遊ばせ。

勝手に咲かるくてなる、何本の花のかげんんもあろう。

六 葱

パリー郊外の葱畑には
赤い革帽被ったる
ウエルサイユ行きの馬車が通る。
けものを採は格で留まれるな、
葱坊主のある二の腕は葱臭不味い。
赤い旗の列、葬式のやうな鈴の声、
うすらぼんやりした昼。
葱の花はけものを抱擁をやせさせては呼いてみた。

（中野英治がんばれ）

芸術家事件解剖は一切はいとちらし
遠く眺められた丘の上の都会は
雲のごとくその夫塔をそびえさせ、
けものを背景に笛を鳴らす。
夕暮の前に——

夕陽はその丘の尚のに落ち
まつ黒に都会の外形を刻み出す。
その瞬間である。笛の鳴りはじめるは
夕暮の前の——

僕等は寒い街に立ち
おそれ恥じかつ、頬を垂れるのみ。

今もあの笛は鳴らしのも夜明は遠い。
まだ遠い——

やがて夕暗はしのびより、僕らを都会の
闇の厚い帳を下ろす。
こうしてやみに溶けるものかけてみる。
いえのに流れるものを感ずる——

闇の達磨を組んで歩く。
夜の鳥が背の羊をやん鳴く。
牛乳の白がする。枯草の白がする。
夜明は遠い。——

今ぼんの達のうるのはどこか知らん。
夜雲をうて、はるかに走るかの
悠々たる風が吹いてゐる。
夜はまだまだ——

もしこの都会は流笛を鳴らす。
悲しみに、又敬々しげに、
その本を鳴らしてゐる。闇を闇の達を感じる。
その本は仲間の——

五月二十四日　丸と数歩。

林の樹の大葉をしると思いかは足上やしい蓄立する。
大葉のマロニエの花咲きたりとなるかこれけば明日は去て見る。
消ケ丘林に咲けば白妙のかたらしづかの花もあらそう。
雪たく富士の山の西の空あかりて武蔵の国は青葉そろいぬ
五月廿五日　昨夜のつゆ。
けふもてこいかの花
里田海岸のあんにいかはい
時計塔あるいるすをいたすすめてこの日さはかなはぬとおもも。
さむさむと言空の風あき来ら晴れし時計塔の向かいてはね。
あ嶽山も見ゆるむさしのくにの晴れ。上野く連ゝ地平のはるかけき。
おなつの白雲熱を見てみたら何ルたらめ帝都のいるすき。
五月廿六日。
博田の足文から便ら。博田はほく道をあるんでみなかるさう。
[illegible]
五月廿七日　葡萄とこで麻衣
おはる月本魅めく夜のものの花。

× ×

深夜火物の如き
二眠車あり
追撃し。夜迫し。
横ら。まつかつら
あらゆる角度をもて宮し。書ら云。

まて、止まるん言を
支る路を上ら来る。
この冷血なる機械を破壊せし。

× ×

われは中年のおもてを妖怪に向かはれ。
いまはに向かて咆哮する獅吼と化し
再び転じては次上ん匍匐する三匹蟲となる。
月は哀傷の眼却りて冷く
次は熱ほく吾が唇を押し開く。ここに
永劫の銘印を印しつけぬ。
われは罪を負えばかの女の面を者の如く
浄土四もて十字路の死もて文をあがなはんとせしに
汚れしわれの肉は絶に何人の救わるところとならむ。
十字架にわれを架する者を執る手いづくにかある。
われは咆哮す、われは哀傷し、次上ん反復し、転々す。
われは醜し、われはおそれ、われをわれにも。ああ——

× ×

木の花の白いは何に似たるらむ
　あの無花果は誠に收めし。
梅雨来るはいくばの後の、あるらめ。
　はつわらはてらすもあらむ。
枇杷の実のみのり多する五月雨。
　あらたみの花法を吟々。

はるけさやいるのをくの夏のトニ。

美人涼みにけばたん出る。

大江戸の名残ゆかしや花火宮。

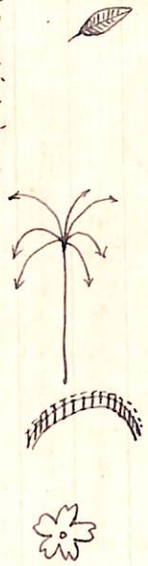
青胡の眉、水晶の瞳。

雲立て、一すじあはき国のはて。

青松の穴に雪とけゆのぼり。

樹密々と木林茂みこめるねいき。

ちんちんゆの変の穂、光。



五月廿八日　ちまき一ヶ

ちまきつくいと見るあいはて、夕食はむ

メメ

大空に星うしまくん帰ってまぬ

二つのむくろ氷おはいぬ。

青空の空気にれ臭ぬまたら

いまは見雲蒼々と照へん。

メメ

木の芽木天狗の自身赤しや半ら

大変、大変。

建白会撲殺運動

流星お江戸の空い埼ずむか

木の花咲きすくるき夏空。

七葉樹の葉は精出の目がする。

通信いおするかるか言きアレテナ。

崖ヨりくつし人骨拾れつしたるか二躰。

高樹憂ヨくけの立身は突吹き立る風

人々集って南岳を望むに些る雲走雲の立たむ。

漫々たる水の流、鴨游ぐはて。

日月の光東方明け月白は霧る。

亭々たる杉林、哀々たる蟬時。

月明るき夜音響るはこの乙女嫁する時近ぬくれ。

風吹くいる馬車の去る方揺る、樹あり即ち遠消ゆる。

古塚や李言きを三千尺

深淵やむ地れて水清し。

林草に伏し南をのぞ大き近つき草の葉に光る。

飢えて千貫の銭をゆめば一鳥帰くん耳ゆすをあるかや。

かなしみ一時に来る、といまれよ天なる雲。

かの実言に鳥ゆるを最刻。

百日紅き花ちるしか今日洞ゆ落つ。

大みそる村に入るを弱ず泊流を止まるを如何せん。

河堤の白柳しんしんゆれや半ずれの流る駅何不走まき

泉を掬ゆ結を掬む一草の野草。

楽原や旅おはるな

飴牛の雲ゆるくれや西ゆめ。

なる高
白扇や　紅き花、黒き蕊、

ひらしの夜一声鳴くに馬車ん自覚めてみる。

つたかづら紅き百円くいりみる婦

汐鳴なく夕やけ空は汐の彼方に紅し、紅し、

石のたゝずまいはき園社に興まかなたら、

堀い垂るる管と船も埠るは長なるすし。

伏して書室を見ると
琅玕の玉を置したる印人のそも思はれ
鳥の舞ふ園亭も壊し、
右二十九日午記す。

五月三十日　文科会

おぼろ月野菊白きを千見、
日の夜の杉の梢も立てくして、

五月廿日　唐帝早三戦
日えう、保田、明和年。

五月廿一日　復活　ルーブ・ウェ私
ヨロヨ、ボーンス

塔木よ月。

六月甲日

塔ければ
紅い魚、夏の下に泳ぐ人う巨竹。
螺旋階段を昇りて女京本を
保証す。

たけば蕊の葉をもり投げてゆく。
紅い花、この野辺に日ぬるは何時。
池端高い鳥しのいるけはいする。
日紅はわ指いつけてゆくもの。
古寺や階の間の小草みな。
古寺や　とびあす垂木て。
蕊の掘もてかしは斬新。
霧城くいる蕪すり早き胡沙の風。
いたいたしくも苗を刺どをめす。
古見は裸の子らの泳ぐ水。
蕊如の傷ん紅をはいよ一生花。
書すむたといつかえられかえはえんかか。

六月六日

くみの実を巻いるが六月すう。
おさなびは土くんぼうに歯を染め。
ゆるさんいちじくの葉は裁らむよ。
きみが園ん白牡若百合の花。
故園の花みな月の日は光ん光。
招搖は星の名ならいつくん光るやうん。

ひしりばしを渡きつゝ女の
涙日中の色はあせむとすらむ。
なるす実血のにじみたる指ん雲よ。

甘蕊有茨棘
甘風有蕾。

一首赤き蕾の二つは白秋の思い出の
中の断章の身につまされて、恋をせぬ
この木立へもいつしんに蕊を吐息す、
きらきらの陽の強き、草の花、蕾の白。

なつかしき方がおりました。なつかしくて何もないでお話いたしました。
墓には花が咲きました。本堂のお墓ひとすみから
毒だみの花がさいたのです。これは僕の墓です。
毒だみの澤も過ぎよほとです。
新茶喫す庵に近しほとです。
おくろめは月にとれて帰る夜かな。
水の香いでゆを云る深夜を目覚む。
大きな雨雲
雲でしこい雷もする来ぬ鶴鳴。

ほとゝぎす新茶すゝる濡れ声のいろ。　才磨

a Miss Shun Kashiwai
a Miss Yuki Kashiwai

~~まはしやなくるやなみのものはなのにほひ~~
わたつはらなみたゝまものはなのかをばきにほひあせんけうしも。

海浪潤藻華

ゆるやかの河内の国のあるしかば
いまみなは、ね姉の雲、めぐる山々
たちいるすものもの・さん十四寺の鐘知らかも
果物はみのらゝれて香ばしき風吹き来る
うまる時、ひそやかにきみがえまいは夢ひとを入れ。
よるやかの、なるをとめにこいまさるこれのこころはかよ思ひゆかまし

六月九日　巴里の屋根の下　ルネ・クレエル

Sous les toits de Paris

くゆれよ煙草ほそぼそと
あてくたのいるのは夏ならば
鋪道いおする陽の光、
あるこころの強すぎる。

くゆれよ煙草　ゆるゝれの
あてくたの空へ上げれば
しんに泪のおちるほど
ねぐの空者のつた

あゝ さつきまで子ども
ほーとを漕いだ子供らは
いまは大人に成り果て、
この鋪道をねり歩く

ねぐ人のぶかつこが
けものはかなしくあてくたの
ネオンうつをみてゐたら
海がこまで充ちて来た。

海はゆりの空のいろ、夕べ方の歌のいろ、のぼれよ煙草ほそぼそ
たのしくたのしく空に入れ

西条八十訳　浅草六区

六月十日

○柘榴やその花紅しこころ痛し。

柘榴は自が茂みに映ゆるいろ。

○此夕陽花に雨あり夕と云ふにけり。

あぢさゐや周遊えゆけば湖見えて。

○毒だみを白しと夜の林かな。

毒だみに梅雨晴れの陽はさすけり。

梅雨時に咲く花々は一年中の他の季節の花にもまして なつかしい味ひと芳を持つ。今日は不図さくらの花の 朱の色にこころを奪はれた。明日は又何かの花が どうかしてうまやかに味いてゐることであろう。

○故園にも苺は地を這ん大飼はん。

竹の花咲くや明るきるの空。

○地震あらてあやめに小魚ゐれてみし。

地震ゆるや地平ん晴るゝ秋文鳥。

○金魚一匹死にてわ縁に蝿来る。

藻の花やいとかに保つ日の光り。

堀割に暑い日かなし夫竹桃が咲き

家鴨が遊ぶ人々は船で往来すとは

獨り柳河丈にはない。

けのしみじみと盥に乗てゐたのわ郷の児等をおもへば

思ひ出の詩もかけぬのみと悲し。

フェミニズムのスローガン

女は男より軟い感情を持つてゐる故大切としてやらねばならぬ。

女は男より狭量である故沈着して要日等云つてやつてはならぬ。

女は男より物のうごき等を厭がるを甚しいから徒に近歩ゐるものゝ云ひ方をしてはならぬ。

女は可愛さうにうくく配する事がるいからいたはり慰めてやらねばならぬ。

―アキラ―

女は表面ひ物を判断する故何事もはつきり底まで見せてやらねば通じないことがある。

女は男より正直であるね〻ゝ嘘しからせ等云つてはならぬ。

女は男より厚軽しい故この点寛容してやらねばならぬ。

女はみすく嘘とわかることでもくら迷はしてこそ信じるから根気よくやらねばならぬ。

女は何うしても英雄と崇拝ねばならぬ大々お芝居臭いことでも真面目にやつて見せねばならぬ。

女は男より頑固ねるゆえその母と弱虫とやつてはならぬ。

中村富士林泉寮を出づ（十三日）

早K駅茅屋一泊 二十一 K勝

1. ひとりなるぬ身をかがみてあさあけの山ぞ来る光に立てり
2. 水ちかく夏姫夏令の近くなれば二の深林は深かしるぬ
3. 山かげにひとり草を刈るこの音にまへ去りしものを
4. いまあるひとりなることなげくかな夕近くして芦葉のいかり
5. 潮みてる入江の川の芦の葉のゆらぎくろみてひとは帰りぬ
6. 夕あかり海上にあり軍艦山年のともしかがやくもとすらむ
7. うつうつとしるくもちにいたみ大日白葵の花みつめをり
8. 十段のかく路極いすりある人のある青雷なかれて葉さやかぬ
9. よいあいにすみいろまさる夏空にすぢ引く雲も人目をかすず
10. 桃道に陽のとぼりぶしばならなりとほくに馬のくつぐ足あゆ
11. かたかごの花咲くみちを回りけりたちまち曇る製茶工の白い
12. 梅雨のあめひそやかにしてあるひ如青濤にかはずこゑら鳴きまる
13. 春すぎて柏の花咲く本もゆる十四いつぱいに蛙はなくも
14. 夏ちかき港の道をゆきにけり海ろの風に路樹はなびきぬ
15. 倉庫のおくのくらきにひとはまたあたらばたらと風おちけるかも
16. みなつきの六月市街のしるかの上 [illegible]
17. 山峡の青田にこもる村ちて 黄南川の花屋敷に咲かしつ
18. 山ちかて本しとおもひしれたちまちに青田はちて水くれ車
19. 補[illegible]港埠頭の夜店 ゆき交つぬれば潮風しるし
20. 掛やはみな茅ぶきそろひし奈良の街本道に紅き傘ゆく

六月二十日　井の頭

梅雨ふきこもりの池はかはねの華た

十魚のむれはあるすんけ　ひるの曇り沼

葉をつく魚のおれのおろおと池いみちたり

つゆのかき杉の林にわけ入り土のあるを

農婦草

訓導[illegible]職表彰の碑は日本のじんそ、ゲゼツをかれんおしつける

ふり上水の先は[illegible]杖の[illegible]

野球をしてゐる井頭の男生

庭球をしてゐる女生

つゆ雲を時にうるはのえらすくはするに帰ん茂うたり

青空からゆるとゐん林間にまばゆきまぶたをおしひらけつ

ひるすぎて青空にのぼる雲すしかこれはおそい帰に立つ雲たちし

ぜんぜんと音立て流る上水に生花の群はゆれ生ふるをうく

湯原ちゑ子やを地を語る

六月十九日　そうし

恒夫は下痢をしてゐた

つゆは蟬を憎んでゐた

おれは無為のにんさを話したが同感は得られなかつた

恒夫はどうして行くのかなあ

服部は遂に来なかつた

十八日分は書かない。

偸盗を読む（三十日）

あく小説が書きたい。

書けさうだ、

兄との生活をとゞめたい。

いや悩ましい、

こゝろがつゝみる肉は小説も書けないぞ

あゝ無為の一日く、

三十一日

梅雨起の小晴を土をおほいつゝ白木蓮の花の咲くを見たりあ

枇杷もむ低木のを指も愛しとおもへいとすなほにも利けるんあらずや

偸盗を畏れよいもみすの内に月出るなるならば明け方家ぬべかり

遠雷が鳴るならば

海に泡立つ白波の

山巌に砕ける様もゆゝむ

砂原に咲くいる春の

もの倩を物もとて来なむ

二十二日

雌、大は食慾をなくしてゐた

毎夜月に吼える野獣になった。

麦がみの葉に熱い腹をこすりつけると

或る彼女は受胎を感じた。

× × ×

健康な食欲と単純な無智と現性を厚顔と

虚栄と淫欲と何れか勝る。

× ×

はかなきはみな月のもの木かげに金色のたわわにゆれし果、

はかなきはみな月の宵ばやも西のはたてにさゆらゆく敗顔の月、

あなたて刺りあと書き男のはゝ

あゝ、たゝこゝの木世のあゞみ笑ひ、

稲妻やあゞみのとげを照らしけり

巻雲にあらしの疾を知もんよ

人肉の物を食ひあした時ニヒルと劇と悲劇が起ることよ、

トーマス・マンの道化者、トリスタンをよむ

二十五日　小竹来る　モンブランの風を見る

二十七日　保田　落井　昭和　紅林を送る

太森氏送別宴

小木は見め

大りなる眼のありて

涙流すも

小木は見め

大りなる虚ろのありて

潮の充ちも

小木はゆめ

大りなる声のありて

男の逆を恵むも

××　××

われは聞きぬ
美しきみかみこえを
われ聞きぬ
なつかしきみがきぬずれ
われききぬ
すげなくもきみがこばむと
こずえよりわれは
耳疲れぬ

ささ　ささ

ささなみを愛すれば
夜おしせまる白き額にも
おいにはおとのけがらまし
耳に常にある道いもとめて女のこえも
しらひけがらむ
ささなみを愛すれば
あの空を行く雲も
むなしき仰がるえし
夜毎にいやく星の光も古き好人の眼もて
ぬづるしめぎこえ

××　××

女を抱きいねる夜は
印度更紗の風姿更紗

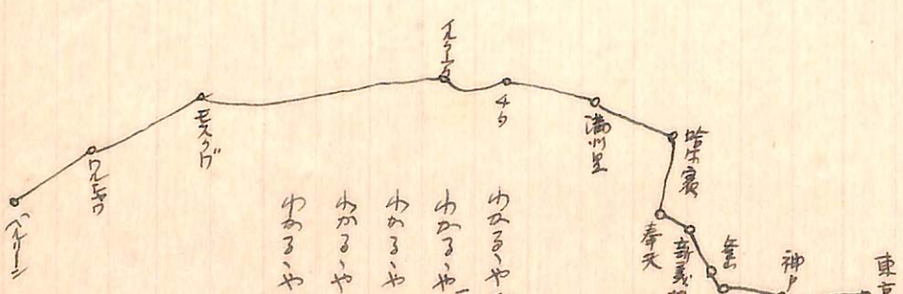
赤と黒との二色が眼に耳にせまる夜は
女をおもいねる夜は
きりつ靖子が陶器か
遠きこころ日と身をせてほのほの中にあれもつむ

二十八日　男のわかれ

男はいとまつよまのを
かたらと汽車は動きし
男は頭を下げけり
ひとりの婦人は帽をとり
立ることあげて見つむ
その日の許めのあたり
男はいとも強きかな
男の別れの涙を見よ

××

蜜の首は赤ければ
草にいてみてあるとても
こいつらのすず人はなし
蜜は臭し草かげに
蜜の見たるこのみる
しんじつ木ものはいけれ



ゆかるや雲も立て立て夏なれば
ゆかるや一木しくる広野かな
ゆかるや草を合めたつみちくま
ゆかるや白はかにまつ風のあつ
ゆかるや

三年ぶ

おもかの水に丸みに玉宮 杉浦氏と今の
福永岩手と偶よ

血のうるおいは
同型の戦の戦いを全儀なくさしめる
しのぎをけずる火花をちらす内乱の予感
兄の眼に怪しげな青い光
弟の心中は兄殺しの炎もえさかってある

× ×

おいらの翼は不二山の下を通ってわれは帰るべし
ちはれる紙のアンプスは見おろし
孤峯不二をてらすは道夫は
おいしさをおぼえしめん
阿倍川をわたりて大井川を流れわれは帰るべし
青嵐ふきわたれば何の気明
魚のこころんでて書を流を接ぎるべし
世まれいのこころんでて書を頑を接ぎるべし
あれ浜名湖も泳ぐべし
遠き海の波紋も見るべし
光をゆくるも帆も見るべし
伊吹山の雪は消え、未ふん以雪はまれども
琵琶の湖は蒼々と岸辺の樹んよるべし
なみなくさびしく一人の男かるべし

つるぎ夕くれの駅に下り立つ

× ×

あちこみや松雨あけの雪鳴りんけり
ふーりやの苔ふれてすずし雨ぬれ
朝のまのたいみんのすずしさよ
地震よるや呼応なるめ激死いと
精々雲成仮吾沈鳴は峡
ゆうやオスの名をあんけり
はるかん雷ふあ松のな
あまの鳥ん風よまきく
猟法の茅立ちもおりつくもれ
温泉宿に新しを欄
りもりの国る竹のうるさん
ハ百は流れ名はとすりぬ
しらる水ん見杉ちつ
鹿鳴草を草坪見ちぬ
白鳩の鳥とめくるや明神社
あめつち近く神鳥下りぬ
奥州路に馬壹りん出る
壹なの花はすりやはたな
[illegible]
おやまの壹ん水仙いけぬ
函館丹の薪弧 唐一東

七月二日　帰隊

S嬢（てるみ）よ

わたしはいまこの時くらい西の都へ帰って来たことを何れ丈け後悔することだろう。東京にいて見た煙草と話のちがいに驚ろかされた此の都は夫丈中を接吻してゆく流る水のきれいな川と、それに輝き分れする虹の様な陽の光と、川岸をとりまく桜樹の様な建物の群である。いまこの風の様に寂寞とした街々の間から見る川はいきいきとして清く、すがすがしい水が勢よくきらきらと光り、すがすがしい建物の影を反映して踊りのぼってゐるので、わたしはむやみやたらの中で何となく広々しい泣きたい様の気分になってゐる。こんなところわたし位十人の手伝いを一寸はなれたりんもう早速ごいものである。おまけに自分の夢の為に歓喜する新しいものとなる（ねばならぬことになるのだ。

S嬢（てるみ）よ

わたしは汚い家屋の裏を通るねずくるしい郊外電車にのって帰って来た。家はまつ黒な第達、同じくらいの年人と共に思い醜い味、父母等が暗い本を取り据居してゐる。これがわたしの一族である。わたしは久闊挨拶するも先ずなめ言葉せず蚊の群を防ぎ、ねずさを嘆いねばならぬのだ。毒蛇なる沖の言ふもそなかおそろしく上むを得ないのだ。おそろしき蚊群は人肉を刺す奇妙な個性と個性とを持つ。それは牛程のこゑの声でわたしの蚊帳のまわりを威嚇するのだ。おまけにその先鋒の数匹は蚊帳の中まで侵入して来た。この群の個性は林の中のきみの家のすぐもるいのだよ。

S嬢（てるみ）よ

七月四日　田辺
七月五日　船越　泊る
七月六日　学校
七月八日　蒲井寺　九日　名松浦氏
七月十日　田辺　十一日　田辺　十日　歓迎会
十二日　対抗試合　十二ー二　負

伊藤　田村　垣内　浦本　島林　杉
久豊　北各　天三　松三　小田
PC
1B
2B
3B(P)
SS
LF
CF
RF
SB

十四日　伊藤氏

十二ー十九　小竹君　御坊行　丸と

南紀の海

わたしの心の阿波の雲みに陽は沈むとしまはさびしも紀の国の浪
波の如くにより来る海の潮に船はゆゆしく夕ならむとす
ゆゆしくも来る海面をいそいそと船むれすぐる夕のさびしさ
まる夏日のゆむは川辺にほの赤しせみ鳴くいるを汽車はるかのも
わたしの原野の雲はとびちりてはまらむとする赤き陽のいろ
くれゆけば峡はたまの家々のまなき壁は眼に迫り来
みなみの紀伊海ゆき紅き花手折りつさも泣んおくらむ
暑きまの道成寺訪ひをとめ思ひのちをかけてこいせむをとめ
大寺の御前の堀のはすの花あかこのごとうす紅う士く
をみなこの執念は蛇と変るわがなく涸いまにこらぬとよ
いんしんの中年の親の商の子いなじみしゆ
呼ばれたりは波よするかんつみの力を思るねむらんめよは
波り舟あらそけてゆら木ゐる川口んおつる紅はのいろ
くれそめば沖の小島によする波いよ、高も鶏の巣島
かつをよる沖の小島の潮をまはら船む一度いきぎくるゆ

夏の歌

嵐あと木の葉の青のしまれる白ひかりもいまは晴れつ　千樹

合歓の上ゆたたん眠ん世まる思ひ出ん流れ月かも　憲吉

木の葉は世の中ん明るくの葉のほのぼのの白い夏の明らん　あき子

その河棕櫚と棕櫚とを問ふ遊ん白し関けんけらしも　白秋

棕櫚の銀河の流れ社はあけめいまこの寝む遊の手の冷えしこと　薫園

塵の如初夏の雨のうたり変るものなかのわき停車場　紫舟

きらきらと海はえりて磯の家松葉牡丹書の雨降る　信綱

青山の町陰の田の水ぬ田んしみじみとして雨ふりんけり　茂吉

萱草をかたしと見つる眼いまは雨ふる木をゆく呉陽がもゆ

高千穂

七月十日　大本林氏を神戸港まで迎る

出ひ立ちは摩耶山天のおいも増れ

ざんざと降れよ洪雨、三葉のかとりクレーンの雨滴がかがいして

メリケン波止場の傳馬船

帆をかついでこぎ出ん　雨がいとはしければ

遠雷とじろくいるを船出かな

七月二十二日　丸三郎を迎る　九行を迎、三島豊田久保　某の

出で立ちや雲をひとかに秋の月、土竜は土の穴がよかるめ

端山に明星かいるよかけ方、鳴くは何鳥　咲るは木の花

立野君

立野君のあの通り初めて歌を詠むもので

孫香のんほひを辿ふきと人ば合むさまかる　杉の力社

夏の雨ふるき花咲くやあって増れも木る見れば家延なし

紀の蔵咲く夏の家朝明けんはねつるべしるお祈りそう

丸の言葉の

いはのの朝明はねん寝よとな男のそともよきかそ

西男不可信

さびしさは棕櫚の花咲くんばん伏みつ

朝々の星調せゆくは見ざるなまけ男を

緑の木群れんかこ木て伏む男が

街ん出て電車ん乗ると

木は又古の伝なる都の人秘詳

まいるなどこはそおまえしてて

やって眠を伏せ眠をみせねん苦の七木ど

この英色妖虎の群は増々新を芝のて

泣も眠の片陰ゆらいはくとなめ来るで——

けのもまん死なびあしとおなしみぬのくてすおゆくるは惜しかるず

死ちんとこころるを木もれもれ悔しきはしかしまし悔ゆしまを木め

即吟五首

金時山を見ん

つくりこもしいつもあまかけりませんんまるんとべとのとそう

暑ければ、ねをしたり、雨降れば、勝負事するルツペのいとう
、うもしき雨宮の如き世の中の、ゐるつまは、碧と信ずど

西の角屋さん

先生のおまず、四りの青田風、車宮を用せて、蛙をきくつ
先生の、帝声ときゐ、ぬ、まとめつ、ゐんほとほとくやしも

帝塚山の、四りを、散歩して、松井でまを、松よ
夕雲は、紅き、雲を、放ちつゝ、消えなむとする、風情を、あす
はろばろを、先立ちしてとら、思ひつゝ、この夕べの、木の、葉さ、耐ええず
みんなみの、明き、星をば、流らし、地の上に、あしをば、伏しきみ
もろびとを、敬はむとか、松井君の、理想ひあし
福澤ぱりの、議論は、年ん、しては、ませてゐたり
奥歯の、あけた、穴は、こけてゐたが
眼の、ちゐ、強さ
たな雲の、たゝ、引く、空を、とやつて、来来、みたらしいとは、いつこに
腹巻をしあつちゝ、みて、テニスもし、英語の、言語、抑揚を、つけしが
ゆ木の、呼吸の、稚ちし
山のぼりは、危険なる、なせず、とゐいし、妹は、ゐ、せ、がゐを、ゐすゆえ、入木
ぬとゐいし、ラムネをのんで、印度に、腹を、ゐ、せし
夏山や、先生、[illegible]、は、ゐのゐる、

丸　三郎

雨しぶき、この山路の、曲り角、きみこ、二人の、下駄の、歯の、二本

淋しさや、山の、曲りの、年歯の、むれ、さやさやの、音、耳を、はなれず
、うぢ、咲く、むこの、山路の、しぶき、雨て、世を、愛し、とそ、ゐ、ゐ出つ

×　×

すゝきの、穂に、やもめ、しとおどろけり、夏の、中なる、秋のこころを
松原の、主子の、社、楠も、茂み、蟬なく、こゑも、こもりて、聞ゆ

×

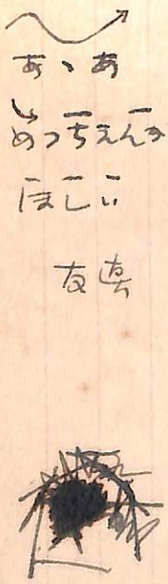
山腹に、群れ立ち、家の、子等さびし、と、今しゐは、ゐ、ふ、なはむ
きの、風の、寒柏の、山のぢんぢんに、ゐ立つ、子ろを、われは、ゐむな
蛇の、風、あなぢ、鳥とゆ、阿波も、ゐゆ、こゆ、の、山、は、やれを、死、ゐむ

× MEINE LIEBE

やめのひと、あはきこゐせし、さびしきは、いまたちかゝるこゝみの、ふれ
ちまたやきとめとそれば、胸しゐむ、わが、思のきみの、横月を、ゐまく、ゐ、ら
はのなきは、ひとのこゐ、きく、身となることの、身の、まのゐ、ゐ、ゐとき
あゐ、佛陀、釈、著、陸も、ゐ、ゐなはも、世をすまて、いまだ、ゐ、せず
寺々の、男、誠、思の、如くやせれば、ゐゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ、佛

×

みちのくの、おくの、入江に、立つ、秋の、風、まちなば、こゐ、やめむとよ
夏やせと、こたへて、後は、泪、ら
耶太郎、やせんけらしも、あてどなき、こゐを、こゐする、この、年ごろに



Warum soll ich nicht schlafen?
Warum soll ich

齋藤茂吉は

日本文学初まりての大文豪なりとせば、
諸氏はむ人、ようきのゆんも多くはあるまじ
されど彼かつてフランスはまことに前古無比の歌人なり
彼の主観は日本文学中の最大にして最初のものなるべし
「ルビヨアの世紀もこん在在独由のあらんことの証明を得も
茂吉の歌は「ルビヨアの」の歌落を示す
はまた「ルビヨアの」茂吉の牧歌と共に新詩なることはまことに当然べき

かくてまた
島木赤彦は天才なき純才なり 茂吉の天才ある純才に對比せる、
立場にあることはいかに最大の幸なり 純にして鈍なる彼の語感は既存のアラ
ユキの病敵サの苦をなせり 彼の主観は深みをしく彼の男力はそのまに河
を歌の新境にひましてゐるなら 彼は蒼古なれど宏大を持たるなら 左4
先の茂吉は天才にもあらざるなら
中村憲吉は両者の中間にあるべし 彼は天才にもあらず純才にもあらず
強きと法を説き数を画す 而も彼の人事はまた木して静なる境地を
拓く 彼の林泉(岳人あり)は雨と霧に蔽はれたる樂園なり 茂吉の
如き人 ある天地にはあらず 赤彦の如き神の作れる天地を説かず人間の作
りし前哨なり 薄・枯梗を載せし叢書の点々たる一ケの木瓜なり
古泉千樫は憲吉に似て稍々茂吉に近し 彼の歌は彼の運命を寓
言す 彼は模範的歌人なり 茂吉の図太さ、憲吉の鈍感さを
持たず 無心にして狭なる感 貴の世界に安住し命を守りて歌うな
り 彼は刻々迫る命を歌いしなり 沙門でし命を吾々は見る。

子規は歌人に非ず 彼の画が画に非ずして同じく彼の歌も歌にあらず 唯彼
は如何にすれば歌へるかを丈は知られたり 道に歌を作らざりしなり
彼の歌は今 ぜひくは三千年の書を得ば同様 或は左千夫の長となりて
表は木しなるも茂吉の眼々なる趣に奇なるは彼の歌なるが許されしなるべし
この批判は孤本の場合には無きなら 孤本は今言年にして子規にあらず更に
三年にして与謝野晶子あり 子規の歌 固く信じて疑はず 彼の歌
は偶々麦林の牧歌に共鳴せんとせしのみ 彼の語感を疑はざ
りなり
左千夫は何年にまでもかのまにまなる 彼はよく骨董を集め茶を飲むし
彼を安住すべし 道に観年まぬなり 左千夫趣味の寺家とまる
べし 歌に於ては既にその域に入りたるなら
茂吉室とその人 彼は嫌いなり その古言の撰択の如何に語感に對し鈍感
なるかを知るべし 或は不快なるべし 二木は詩人にして彼命的々たる
が 如何にかつかとて別に許さるべきなり 素朴と素純とは混同
すべからざるなり 彼は畢竟写実なり 詩人に非ず 写実子規に似たり

斎藤茂吉

雪の中にあるの女はるる見ゆるのほのぼの 織梅のいかなしの木ども
この中の脳病院の二階より蓋地見ば花もそえにけるかな
屋根にあるて微けき雪わえにけり目上の術のなりはいの見ゆ
くれつてたいし子ゆえん春の花ゆえ大人なしもものを
持たず無心にして狭なる感 貴の世界に安住し命を守りて歌うな
り 彼は刻々迫る命を歌いしなり 沙門でし命を吾々は見る。
悟ぼうとも此の身もつれん黙しつ入るの中に無花果をはむ

猫の舌のようなん紅き手の蝋のうつくしき目覚めけるかも
めん鶏ら砂あびおれいつとも剃刀研人は過ぎ行きにけり
泥いろの山椒魚はそまむとしたつしをれば静かなるかも
鳳仙花城をんの葉ら葉ら茂るタゆたまけて思ひあれたれ
さ陰めて母とはなりのかくらんぼ赤くもて越えんけるかも
山ふかき苔の葉の中ん夕のみづ天より降りて来らるんけり

島木赤彦

常緑木の林の中ん家あらしある時は男の泣声きこゆ
青海のもちゐんつて書一久し錦絵をうつり居らけるかも
夕焼空ニげなまれる下にして薄らあとする潮の静けさ
なよ竹の風のくぼみんなまれよ沼のらくんはあたんけり
国境をこのぼりこし野のたんぼのりはきは辛夷の花か
夕日の当まぬけれども菊の花咲く所は国まり咲らも
あ手んたんん丸ひる書一久しちゃんまりけり鳳仙花の花

中村憲吉

二十五日 高田三神祭
二十六日 帰宅 ― 力竹巻お素

植物第

遠山なつ天蓋の空にかも咲きけの夾竹桃の枝のあるかと
槐は二人じゆで人久知りする花 神戸もうすく行ける
夕暮の西空を劃る黒い丸山半腹に一つ白いは百合かゆ木である
夏の空には雲みるうつくしくクローバもしばらく花咲くとも休みます
あ、深い夕べの空鳥が中へ入ったまゝ帰らぬ二本はキリスの幻想
クラヤオラスのこのある卿樹にもまはのない子手はけしんでまたもタんとなる
朱色の何といふ花かしら真柳実な真赤の花である
まをわれらが遊ぶ男どもは海辺の如き山の草地に坐木蔭らる（まである
カンカンと出帆の銅鑼が鳴れば八ツくと梯子を下りて海のなかを投げるのである
ぺんぺん猫の眼は女人の因業深きを木にも似て今百年の時計音と共に卓の上の
花瓶をんらみつく
夜の壺の灯がおこすはるかなるかの正体をこへ なよ竹板の花んもよしそ
かすかに咲けよ桐の花 西風街道かこれしけれ
病院の庭にはまぐくの花が咲けいも血ん似た夕リアより出のしい傷いもの花
ひとりまぬ
楊梅の実ひ殺ん栗鼠が三十三匹ん上りますけな
オランダ菓の切子詰る器にとても入れたりトマトの紅いく滴る血潮を
平手道酒ねかしやな 雨根のりスの一輪摘よ 血ん吐くいとほしなんかか

（七月三十日）

老いた巫女 ―
しばんだ黄色い顔、衰えた眼をすえて
赤い袴の官女風なのが
太刀捲きもち
太鼓ん合せ 舞台を動く
かくかくと首をふりつかせ ―
しかも眼は据えたり
太鼓は逃げた 戎々も尚も追かけ
ところどころと泣きそうなこえをひいてゐる

星夜 響 (七月廿八日)

みんなみの山脈におつる銀河 あなたにしきもまはすにけり
みんなみの蝎の毒針の天に輝き秋はきむかふ
毒もてる天蝎宮の天中に紅き星ある夏にさかし
かさゝもの渡せる橋も涼しけれ銀河にうすく雲ながれ来し
うつくしき天琴座をば指さしつ寄らばて女はなつかくすらむ
海原はかけしつまりて漁火の集る方に星は流れき
六甲の山の中腹の灯火を星にまがへむ住まひのあたり
山峡に八月は来て立ちしもよ夕べ青田に星宮おちぬ
水木ふく八月の潮のほとゝぎす星夜を指して泣る夜更けた
はろばろし少年の日の感傷は南極星を求めて止まず
楊柳樹木の実をおとす南の海辺んきびゝ十字星ゆ
土人らの胡弓も今は止みけり怪鳥叫ぶ星明き下
黒々と熱帯林はのけしつもりしづしづと星光せり上り来る

月明き夕べぬか星消え果て、わかこいの星のみぞ残る
つれなきはきみかこころか星明き夏川の辺ん波と出ています

Ein armer Mann
muß hungern.

夜疲れしると思ふ
秋早き桔梗の花
の光も痛し

嶺丘耿太郎

15

空

一、軽気球あがる空のすみとぼるものかなしは眼に見えくるも
軽気球の繋索まがよそらのいろあかきがあかにくいるむため

×

二、はるそらのあんどろめたの星こひし魚もゆむるあゆ空のもと
太陽のてるうらおはに星らあてこよひの雲にかくれにける
薔薇のはなちらりあり来るなりいろいにゆのう思ふのため

×

三、聖巣のそらに消えなる沈のとき白猫まりものにかくれぬ
あゑ上げはのぼりて空にいたらむず二つ花ゆるあゆにはたして

×

四、ばんやともものおしろくはるそらはけんげの花を咲ましにけり

海

一、機関を船員こちへ来るなりあのあをを見に[illegible]ぼくらはゆかん
もだんなれはとて海港の埠頭[illegible]に来り魚見にけり
機関の[illegible]海をおよげる魚らの[illegible]硝は水面にいるかりにけり

×

二、どんちゃと沖が曇ってゐたるホテルの庭の椅子に人[illegible]来ず
断当年のホテルの白土曇り日の沖ゆく汽船はあえなくしけり

×

三、海ばたに癲狂院をたてければ狂人つゐる船入らるも
狂人のこゑもうまこゆけめもまた紫いろのあはまりし

×

四、地図をれば太平洋は青ちけり赤き航路に眼をおしあてぬ

×

五、港町のゆくをゆき辻角に海につまる道にあるけり
海にゆく道やに[illegible]ひと[illegible]まそそら、白波立つが見えるるなら
ちかくの海に耳をたむける

×

六、四方に壁めぐらせる室にあて[illegible]

六、わが室は三方に壁めぐらせて海まく窓はあけておかうよ
えんげんの死にゆく時に海べりの時計塔には鴎まにけり

ふるさと

一、ふるさとに夏来るこは松原に白白はくはぬ松露をけく

×

二、三大星しぶしぶのぼりわがともの新聖の[illegible]杉ヒとびあがにけり
[illegible]の山菓子もらうたこを耳ずてざくろ咲く家にいる中かうず

×

三、ゆう来ばくちなしの花にほひくる蛙のたどひ青く光りゐる

神戸港

日のくれはなかなか来ねばいつまでも時計塔にのこる赤い陽のいろ
方々の時計塔の文字やうやくに見えなくなって海はくれる
冬空を巻積雲はゆきさきも[illegible]外套立てく船は降り来る
うすくろく日の丸の旗かいやけり海港をくれて流船は出てゆく
川崎の煙突の向のに流るゆえあつめたつになって日は沈みけり
山々の土地土地がぼったしみえんで来るふんすの旗なびきけるかも
ひとびとの船例を通りぼくゆにマストの先に鳥舞ってゐる
巻雲も海をひとめりなれば長くこぼしゐゆ出てゆくも
まつ白なビルデングの塔は富士ど人こもってゐてこぼまゐもゆ
海面に腹赤き船るくゐて煙突くれば戦おもほゆ
天主公教会の十字架の光りかなしけれ見えをむるそらのなごみに
海べりに立ちしわれもこのあゆの海のくらをおそれにけるも
あゆ海はうしほにはばずいた流るくらきあ中におびるものあるぞ
いろくずもわなそそにしつみゆむちなむ埠頭にまわぐ[illegible]のあたさ
外套を立てそそにのる人こうものもるはずにすむゆきにけり
ゆうつまそそくいとと柿ゆくさむくつれなくひはふきけり
ユ[illegible]ニオレ[illegible]ひやそいるかへる街に来て以人[illegible]眼のこゑも白[illegible]車[illegible]
[illegible]えあ[illegible]あるもちちを知[illegible]ひとを[illegible]
あくとこのいろなかつくうれいはきくる[illegible]